

Fate/kaleid swords

けふすけ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その日までは普通の生活だった。

誰もが笑い、当たり前のように朝起きて、朝食をとり、それぞれの行くべき場所に行く。

士郎と呼ばれる少年もまた、友達と遊び過ごす日常を楽しんでいた。

しかしそれも新都の大火災と共に去っていく。

確実な死を確かに感じながら、それでも士郎にとっての正義の味方、衛宮切嗣に救われる。

彼と共に新しい家族の中で、士郎は再び幸せを手に入れていく。

そして運命の夜を迎える——

処女作です。

ベースはプリヤを使い、そこに原作を乗せています。拙い文章と、綻びのある設定は大目に見てください。それでは、最後までお付き合いください。

目次

| | |
|--------------------------------|-----|
| プロローグ | 1 |
| 1. Happy Happening Morning | 6 |
| 2. 魔術師と魔法少女 | 31 |
| 3. Jumping the magic | 88 |
| 4. Second Owner | 125 |
| 5. 1. 再戦と選択 | 156 |

プロローグ

それはまるで閃光のようだった。

一閃、黒い光のように俺の命を絶つべく、それは突きつけられる。

——死ぬ。

俺は確かに悟った。

あの日、養父である切嗣に命を助けられ、今日まで生きてきた。それまでに失ってきた幸せを与えらながら、俺は笑顔で生きてきた。

こんなにもあつさり失つていいのか？

理不尽すぎる。どれほど努力しても、辛い想いをしたところで、失うのは一瞬なのだ。

俺はそれを知っていたからこそ、次は取りこぼさないようにと努力をしてきたはずだ。

悔しい。

涙が出るくらい悔しい。

何が悔しいか？

それはあの日助けられた命をここで失うこともある。

しかし、それ以上に守れなかったことが悔しい。

一つは切嗣との約束。

そしてもう一つは――

「……えっ？」

風が止む。

それを感じることができるといふことは、俺が生きているといふこと。

体中に激痛は走れども、命だけは助かっている。

これは間違いのないことであり、本来ならばありえないはずのこと。

だから俺は驚き、地面に尻を着きながらも敵を見ていた。

「――あ、」

言葉を失った。

それは目に映る光景があまりにも美しかったから。

月の光を受け、彼女は金色の髪の毛を揺らしている。

そしてまるで雪のように白い肌と、それとは対照的な程に黒い鎧を纏っている。

綺麗だった。

まるで湖に住んでいる妖精のように神秘的だ。

それこそ童話の中からそのまま現れたんじゃないかと思ってしまう。

ほんの一瞬だけ、本当に一瞬だけ死への恐怖や悔しさ、様々な気持ちが消えた。そして、いつか見た光景とこの一瞬を重ねていた。

そう、たった一つの奇跡を求めて、共に戦った彼女との運命の夜を。

私にとっての出会い。

それはあまりにも運命的なんて言えるものではなくて、きつと漫画にしたらコメディーのようなものだと思う。

お風呂に入っていたら、お空に流れ星を見つけた。ここまではまだロマンチック。すると、お風呂の電気を消していたせいでお兄ちゃんが間違えてお風呂に入ってきてしまった。この時点できつと少女マンガというよりも青年誌、ライトノベルの類。

次の瞬間、一本のステッキの闖入。これにより完璧にコメディー化。

これとの様々なコメディーの末、私は魔法少女となつてしまった。

ちよつと前までの私ならきつと喜ぶことができたのだろうけど、理想が現実になつてしまうと、どうしても受け入れられない自分が生まれてしまう。

そう、ここまでは運命の夜の序章。

不思議で特に性格が歪んでいるステッキとの出会いよりも、私にとって運命的だったのは一人の魔術師との出会い。

彼女は私よりもずっと綺麗な黒い髪の毛をなびかせて、一つの奇跡を見せてくれた。

「私と契約してサーヴァントになりなさい」

そのピンと張った背筋のまま、私に指を指して彼女はそう言った。

これより始まる。私にとって一生忘れられない彼女たちとの物語が。

1. Happy—Happning—Morning

世界が赤かった。

それはまるで赤い絵の具で白い画用紙を真っ赤に染めたようなもの。あまりにも乱雑でありながら、それでいてどこまでも濃い赤。

現実、世界は白い画用紙などではない。

それでも、いくつもの色を使って描かれた画用紙を何枚も合わせたものが世界とも例えられるのだろう。

まるで絵画のような世界。自分もそこに描かれる一人であり、その住人として確かに違和感なく存在していたはずだ。

しかし、そんな絵の中に一点の黒が落とされた。それは広く浸み、消すことはできない。やがてその浸みはすべてを侵食していく。

そんな黒さえも飲み込む赤。

すべてを侵食したものを更に飲み込み、世界は赤に染め上げられる。

——俺は走っていた。

全てから逃げるために。

——俺は耳を塞いだ。

助けを求める声を聞きたくなかったから。もしもそれに耳を傾けていたら、俺はきつと足を止めていたから。

——俺はただ前だけを見ていた。

ただ逃げるための道だけを見て、走っていた。助かるかもしれない人、助からなかった人、それらを喰らう全てから目を背けたかったから。

——そして、俺は殺した。

真つ黒に染まった俺の手は、赤になっていく。

——悪い夢を見た。

気持ちが悪い。

まだ冷房を着けるには早い、昼間は汗をかけるくらいの時期。朝晩はタオルケットをかけ、窓を開けていれば十分寝れるくらいの環境だ。

それにも関わらず、ベタベタと纏わりつくような汗をかいた。それが気持ち悪くて、俺は目を覚ます。

「……今、何時だ？」

目覚まし時計に手を伸ばす。

未だにアラームが鳴っていないので、普段起きるよりも早いだろうが、

「む……五時半か」

六時にセットしたアラームよりも三十分早かったらしい。

ため息を一つ着き、かといって二度寝をする気にもなれなかったので体を起こす。

少し早い、シャワーを浴びてから朝食を用意するか。なんせ我が家の食卓は賑やかだ。朝からしつかり食べる人たちが揃っている、こちらもしつかりと準備をした
い。

それとも、夢見が悪くてもちやんと日課を行うべきか。

……答えはそう悩まずしてもう出ていた。

「行つてきます」

まだ誰も起きていない自宅のドアを閉め、道路で軽くストレッチをする。

いくら十七歳といえど、準備運動は重要だ。

ただでさえ筋肉の付き方は悪く、人よりも努力をしなければならぬ体質なのだ。可能な限り、体には気を使ってあげたい。

「——よし」

準備運動は終了。

さて、今日はいつともよりも早く起きたおかげで時間に余裕がある。

「少し距離を伸ばすかな」

そう呟きながら、ゆつくりとジョギングを始める。

衛宮士郎の趣味は機械いじりと鍛錬だ。

もちろんこんなことは当人が言うわけがない。

確かに趣味というほど熱中できるものが今はなく、そう言われて完全に反論できなかった自分もいる。それでも、機械を触るのは生徒会の手伝い程度。鍛錬だって、元々は部活のためにやっていたぐらいだ。

なので、そういった評価を受けることは心外だ。

無論、それを訴えたところで聞いてくれる人もいないのでどうしようもない。現にこうして毎日町内をランニングし、家の庭で筋トレと竹刀の素振りを行っているのだ。鍛錬が趣味と言われても否定できないのだが。

日の出の時間はすっかり早くなり、日差しが眩しかった。

俺は手で軽く目を覆いながら走る。風を切り、ゆつくりとスピードを上げる俺は町内を走り切り、気づくと新都に繋がる橋までたどり着いていた。

「少し夢中になりすぎたかな……」

普段よりも早く、かつ遠くまで来てしまった。

普段はペースなどは気にしながら走っているのに、今日に限ってはそれがなかった。

十中八九、今朝の夢のせいだろう。

あれのせいで、気持ちの悪い朝を迎えてしまった。だからこそ、走ることで気持ちの良い汗と一緒に、嫌なものをすべて流しだしたかった。

ただ、体には気を付けないと思っているのにこれだ。

俺は相変わらずの未熟さに苦笑いを浮かべながら、近くの公園で休憩をとることにした。

「ただいま」

家に帰ると、味噌汁の匂いがリビングの方から流れてくる。

「あら、今日は少し遅い帰りでしたね」

エプロン姿がよく似合う、我が家の家政婦さん、セラが顔を覗かせる。

「いや……、起きるのは早かったんだけどさ、ちよつと調子に乗って遠くまで走っちゃつてさ」

「はあ……。まあ学校に遅刻しない程度でしたら、いくらでもやってもらつてかまいませんが」

「大丈夫。今は部活の朝練とかないから、そう遅刻することはないよ」

「そう、ですか……?」

「ああ。まあたまに生徒会の手伝いがあるくらい……かな」

靴を脱ぐと、すっかり乳酸がたまつた足を軽く解す。

ふむ。思いの外に長距離を走つたせいで、やはり体はだいぶ疲れを示している。まだ鍛錬が足りない証拠だ。

ふうと一息つくと、俺は立ち上がる。

「朝ごはん、何か手伝うことはある？」

——ピキン。空気が割れる。

俺の発言を聞いた瞬間、セラの表情は一瞬で変わる。それはまさに般若。

自分が地雷を踏んでしまったことに気付くよりも先に、セラの罵声が飛んでくる。

「シロウー！あなたはいつもそうやって私の仕事を奪う！！」

ああ、失敗した。そう思って頭を抱えるも、時既に遅し。

セラのマシンガンのような声に俺は一切抗うことはできなかつた。

「セラ、朝からうるさい。近所迷惑」

もう一人、リビングから顔を出す。彼女もセラと同様に我が家の家政婦さん、リズである。……が、その肩書はどこへか、今朝も酷く寝癖をつけながら、眠そうな表情で俺たちを見ている。

セラはこの職に誇りを持っている。そんな彼女にとってはこの光景はたまつたものではないだろう。怒りの矛先を変え、セラはリズに怒鳴り散らす。

その光景に、元をただせば俺が原因であるせいか、酷く申し訳なきを感じた。

「——つて、なんか焦げ臭くないか?」

ヒートアップするセラを横目に、俺は眩く。

この臭いはキッチンの方から。そう深く考えなくても十分に答えは出た。

「いけません! 目玉焼きが!!」

先程までの勢いはまたどこへ。リズを置き去りにして、キッチンへと向かうセラ。

その後聞こえた悲鳴からして、今朝の目玉焼きは酷い有様になっていたのだろう。

……………本当に申し訳ない。

「シロウ。いくら夏になりかけていっても、汗をかいたままなのはよくない。シャワー浴びるか、着替えるかしてきな」

そう言うリズは少しドヤ顔にも見える。……まさか全て計算していたのか?

真実はよくわからないが、彼女は割とこういつた側面を時々見せる。普段はだらしない、何を考えているのかよくわからないが、俺たちに気を使うことはもちろん、お姉ちゃんのような気質を見せる時もある。

あまり時間もない中、答えがなかなか出ないことを考えても仕方がない、か。

「ありがとう。お言葉に甘えてさっさとシャワー浴びてきちゃうよ」

「そうして。それから、上がったらいリヤを起こしてあげて。あの娘、今朝もちよつと寝坊気味」

「了解。……………つて、昨日に引き続き珍しいな」

俺たちは簡単なやり取りを終えると、リズはセラのところへ、俺は浴室に向かった。

i n t e r l u d e 1

目覚ましが鳴る。

ジリジリジリジリジリジリジリジリ——

耳を突く音に、普通なら誰もが眉間に皺を寄せるだろう。そして、うるさいと耳に手を当てながら、諸悪の根源を叩くに違いない。

……が、あいにくこの部屋の主は今日に限ってそれを止めることをしなかった。いや、正確にはできなかつたというべきか。

「あーあ……イリヤさんつたら本当に寝坊助ですね」

呆れた様子でため息をつく一本のステッキ。それはふよふよと宙を浮きながら、ベッドの上で規則正しく寝息を立てている自分の主を見ていた。

そんな主はというと、何度も鳴る目覚まし時計のアラームを聞いても起きるそぶりは見せなかった。

その調子に少し不安を抱くステッキだったが、彼女が普通の小学生であることと、多少持っていた厄介事に巻き込んでしまったことに対する申し訳なさがあつた。

「今日だけですからね？本当に」

ため息交じりのステッキは器用に白い羽を動かし、目覚まし時計を止めた。

時刻は七時半を回り、既に朝食の準備は整っているだろう。一階から上ってくる匂いで予想はついた。だからこそ、もうすぐ主の想い人が起こしに来ることは容易に想像でききる。

「やっぱりお姫様の目覚めは王子様のKISS☆によるものですよね!!」

ぱたぱたと羽を忙しく動かしながら、ステッキはテンションを上げながら叫ぶ。

明らかな確信犯。主のことを純粋に思つて——などはいなく、その趣味。主を一種の遊び道具のようにするステッキの歪んだ性格故の行動だ。

それは製作者の影響か。どちらにしても、純粹な心の持ち主である少女からしたら、迷惑極まりない。

ドン、ドン、ドン……………

「おっ！来ました、来ました!!」

ステッキは頻りに部屋の中を飛び回り、興奮を隠せない様子だ。

ただ、このままでは見つかってしまう。それは、家主に黙って匿っている少女に迷惑がかかることだし、何より自身にも影響する。

素早く部屋にある本棚の陰に隠れ、それは事の成り行きを見守ろうとする。

コンコン。

部屋の中にノックの音が響く。

「イリヤ、朝だぞ」

続いて入ってくるのは、部屋の主であるイリヤスフィール・フォン・アインツベルンの兄、衛宮士郎の声。

彼は家族でありながらも、相手は年頃の女の子であることを考慮してか、律儀にノッ

クをしてから声をかける。

しかし、あれほどの目覚ましの音でも起きなかったイリヤだ。いくら彼女にとっての王子様であつても、目を覚ますには至らなかつた。

「もう、お兄さんはダメですね。こういうときはもつと押さなきや!!」

物陰に隠れながら、未だに部屋に入ろうとしない士郎に対して煮え切らない気持ちを爆発させるステツキ、ルビー。

無論、そんなことも気づかないイリヤは相変わらず寢息を立てている。

「おーい、イリヤ。遅刻しちゃうぞ」

再び声が響く。

それでは絶対に起きない。早く入ってこい!!

ルビーは必死に未だ開かない扉に向かって念を送る。

「セラが怒っちゃうぞ。今日はなんとつてセラが朝食作つたんだから、冷めないうちに食べなきや」

そんなルビーの念も無駄となる。

士郎は相変わらず声をかけるだけ。兄である前に、やはり妹のポリシイーを考えた

り、何よりも女性として扱っている部分が大きかった。

「うわあ、そういうええお兄さんは相当の朴念仁でしたね。イリヤさんの話を聞いてなんとなく苦勞を察しちやいましたよ」

深々とため息をつくルビー。

いくら面白いことを望んでも、これ以上は仕方がない。

煮え切らない気持ちを抱えながら、一人で騒ぐよりもここでイリヤを起こし、あたふたとする彼女を見る方が楽しいのでは？

案外そちらの方がいいかもしれない。

思い立ったら即結構。

これぞルビーちゃん。常にマスターのことを考える、スパーステツキである。

「……入るぞお——」

申し訳ないくらいに小さい声。

それが士郎のものだと気づく頃には、ルビーは既にベッドに向かっている。

まずい。このままではバレる。

ルビーは必死に当たりを見渡し、隠れる場所を探す。

「……背に腹は代えられませんか」

ルビーはそれだけ呟くとイリヤの勉強机にコテンと寝そべった。

自分が生きているステツキだとばれなければいい。とりあえず一種の置物として徹することにしたルビー。

(朴念仁のお兄さんですからね。きつと気づかないでしょう)

そもそもそんな彼が入ってきたこと自体、ルビーにとっては予想外だったのだが。

ギーと音を立ててドアは開かれる。

気まずそうに顔を覗かせる土郎。初めて入るわけではないのに、緊張して仕方がなかった。

キョロキョロと辺りを見渡すその姿を客観的に見れば完全に危ないやつである。

『妹の部屋を物色する変態兄』

間違いなくこの家、近所の人に見られたらそんなレッテルを貼られるに違いない。

それでも、彼をよく知る人物なら、また要領悪かったのだろう、どんくさいな……と
思うのだろう。

ただ、この現場を唯一目撃しているルビーからしたら、そのレッテル通り、それ以上

に自身の楽しさを満たすだけの事象である。

声を上げたいのを必死に我慢しながら、ルビーはただ録画に徹する。

「……………」

(あれ?)

そんなルビーが抱いた違和感。

挙動不審な行動をしていた土郎がルビーの方を見たのだ。それもすっかりと。

部屋の一部のようにしていたはずのルビー。それが自分の妹の部屋からしたら異物だと判断したのだろうか。

だとしたら、認識が甘かった。

“全てにおいて未熟者”である衛宮士郎と評価をしていたルビーにとって、それは覆すべきものなかもしれない。

そう思考を巡らせているルビーから視線を外す士郎。

「ほら、イリヤ。もう起きる時間だぞ」

士郎はゆっくりとイリヤが眠るベッドまで近寄ると、身を屈めて彼女の高さに合わせて

る。

極力優しい声で、それでいて寝坊助な妹を叱るような調子で士郎はイリヤを起こす。

「ん——」

イリヤが唸る。

——チャーンズ!!

悪魔が降りた。

それは冷徹に笑い、悪魔は自身の生きがいを全うする。

「——え?」

トン。

士郎の背中をルビーは押した。その表現通り、未だ一步を踏み出せない勇気を持ってない少年に勇気を与えるように——

「な、なんでさ!?!」

物理的に押された士郎は咄嗟にベッドに手を着く。

しかしそれは不可抗力でありながら、あまりにも状況的にいかんもの。

「……………ふえ？」

イリヤは目を覚ます。

ゆつくりと開かれた瞼の億、紅い瞳はしっかりと士郎の顔を見ていた。

母親譲りの綺麗な雪のような肌と髪の毛。そして、まるで飲み込まれるような紅い瞳。

「お、おはよう……………イリヤ……………」

「……………おはよう……………お兄——」

空気が凍る。

効果音を鳴らすなら、ピシン。

夏場というのに、寒ささえ感じるこの状況に、士郎の顔からは血の気が引いていく。

イリヤはというと、寝ぼけ眼のまま辺りを見渡す。

起き上がるうにも、自分の上に覆いかぶさる兄。間違いなくここは自分の部屋で、自分はベッドで寝ていて——

「イ、イリヤ……これはだな、不可抗力で——」
ドン。

今度は押すのではなく、突き飛ばす。

これがトドメと言わんばかりに、ルビーは土郎の背中を叩いた。

不意打ちでなければ多少の結果は変わっていたかもしれない。しかし、現実が変わることは何もない。

必然的に土郎とイリヤの顔は接近する。その距離は、もはやキスなんて容易くできるような距離だ。

真つ青になる土郎と対照的に、誰から見てもわかるくらいに顔を真つ赤にするイリヤ。

「お、お兄ちゃんの——」

こうして今朝もルビーは満足した。

自身のマスターが恋にトキメク瞬間をしかと目に焼き付け、きつちり録画もできたことに。

無論、周りの被害などは一切考えてなどいないのだが。

interlude out

「いただきます……」

食卓に全員が揃ったところで、手を合わせ、俺たちはいつも少し遅めの朝食をとることになる。

「い、いただきます……」

俺に続きイリヤ。顔を伏せながら、ぽつりと呟くように言葉を放つ彼女に対し、俺は罪悪感に悩まされる。

「どうかなさいましたか？イリヤさん?!」

事情を全く知らないセラ。俺たちの保護者ということもあり、彼女は心配そうにイリヤの顔を覗き込んでくる。もちろんイリヤはというと、そんな彼女に心配をかけまいと努めて笑っている。

当事者であり、兄である俺としては、その笑顔が非常に痛々しく感じてしまう。

もぐもぐと口を動かしながらその様子を見ているリズ。彼女は呆れたようにセラを見る。

「シロウの頬手形で真っ赤。悪戯も程々にしておかなくちゃね」と、突拍子もないことを言ってきた。

「——なっ!?!」

嫌な予感は何となくしていた。だが、セラの前で言うだろうか、普通……

案の定、セラは俺の顔を凝視すると、ある程度察したらしい。先程までとは一転、まさに鬼の形相となり、彼女は俺の胸ぐらを掴んでくる。

「どういうことですか、シロウ!?!イリヤさんに何をしたんですか!?!?」

「ご、誤解だ!! たぶん、セラが思っていることはしていない!! たぶん!!!」

「そんなにもたぶんを強調されては信頼ができると思っっているのですか!?!」

御もつとも。

俺は抵抗を許されることなく、ぐわんぐわんと揺さぶられる。

「セ、セラ!! お兄ちゃんは悪くないから!!!」

その間に割って入るイリヤ。

直接手を出せないまでも、イリヤの発言によりセラの力は弱まる。

「で、ですがイリヤさん……」

「そうそう。シロウは悪くない。強いて言うなら、悪戯っ子が悪い」
「何を言っているんですか、リズ!!」

相変わらず箸から手を離さないリズ。……一体どこまで気づいていて、知っているんだか。

うがあと唸るセラの様子はまるでどこぞの虎。

ここまでくると、止められる人間は限られてくる。残念なことに、我が家においての立場が最底辺である俺にはどうすることもできない。

セラの怒りの矛先が俺からリズに移ったこの瞬間、俺は必死に朝食を食べる。

いくら慌ただしく、急いでいたとしても、せつかくセラが作ってくれた朝食だ。残すわけにはいかない。

そんな俺の様子を見ながら、イリヤもはっと我に返った様子で朝食を食べていく。

「それよりもシロ——」

「御馳走様!!」

セラが再びこちらに振り向くと同時に、俺は食器を置く。

「まずいまずい!遅刻する!!」

「あつ、ちよつと!!」

少しわざとらしい気もするが、背に腹は代えられない。このままでは、本当に遅刻してしまいそうだ。

遅刻の原因が妹起こした時に発生したちよつとした問題だと先生に言えるはずもない。ましてや、それをみんなに聞かせれるわけがなかった。

俺は手際よく、食器をシンクへ入れる。

「シロウ！遅刻しそうと言いながら、食器を洗うんじゃありません!!」

「うぐつ……」

しまった。いつもの癖で、ついつい洗い物にまで手を出してしまった。

「食器ぐらいセラが洗っておくから大丈夫」

「あなたはもつと家事を手伝いなさい!!」

いつもの調子で言うウリズ。この頃家事に対する手伝いを全くしない彼女に対し、本来同僚であるはずのセラはうがあと怒鳴る。

「ぐ、ぐちそうさま!!」

慌てて俺に続くイリヤ。

「イリヤさんまでそんなに急いで」

「わ、私も遅刻しそうだったから……!!そう!!今日はちよつと寝坊気味だったし!!!」

少し無理やりの気もするが、セラを納得させようとするイリヤ。

キッチンに立つ俺の隣まで彼女も食器を持ってくると、水を張ったシンクにそれを入れる。

「わかりましたから。二人とも食器は水につけて、早く学校に行っておいてください……」

少し頭が痛そうに手を当てて言うセラ。

その様子にももちろん罪悪が生まれるが、これ以上呑気にもしてられない。

「ごめん。明日の朝は俺が用意するから」

「今晚は？」

俺は食器を水に着け、カバンを背負う。そんな俺の後ろ姿にリズは尋ねてくる。

「夜は衛宮の家で飯を食ってくる。藤ねえがたまには飯を作れ、ってうるさくて……」

「あ、それ最近いつも言ってる。たまにはイリヤちゃんの家でご飯食べたいって。それからお兄ちゃんが作ってくれたお弁当もよく横からつまみ食いをしているなあ……」

「ダメだぞ、イリヤ。藤ねえに餌を与えたら」

「餌って……。お兄ちゃん、藤村先生に対する態度雑じゃない？」

そんなことはないはずだ。

これでも、高校の教師をしていた頃の藤ねえを一番丁寧に扱っていたのは俺だと自負している。もちろん、暴走を恐れての処置だが。

パタパタと忙しない様子でイリヤも支度を済ましていく。

「それじゃあ夕飯は三人分で大丈夫ですね」

「申し訳ないけどそれでよろしく」

「いえ。藤村先生によりしくお伝えください」

朝食の途中であつたにも関わらず、玄関までお見送りをしてくれるセラ。

いつも思うのだが、本当に俺たちに——いや、イリヤに対してよく気を使つてくれる。

「それじゃあ明日の朝食に期待しているぞ、シロウ」

「おう。明日は久々の朝食作りだから、腕によりをかけてやる」

「あ、あなたは——」

「まずい。」

リズの期待に応えたつもりなのだが、やはり家事全般はセラがこなしたいと思つてゐるのだ。そんなつもりはないのだが、俺はそれに手を出していることになる。

いつものことなのだが、セラはそれに対してよくは思っていない。

このままじゃせつかく回避したはずのお説教が——

「お兄ちゃん、行こう！」

ふわっと髪を舞い上げながら、イリヤは俺の手を取って駆け出す。

「行つてきます!!」

勢いよくドアを開け、出ていくイリヤ。俺もそれに必然的についていく形なる。

「い、行つてきます!!」

俺は少しそれに動揺しながらも、少し遅れて我が家の家政婦さんたちに挨拶をする。

2. 魔術師と魔法少女

「お、おはよう……衛宮君!!」

いつもに比べて少し遅く学校に着いた俺に一番最初に声をかけてきたのは、クラスメイトの森山奈菜已だ。彼女はふんわりと軽くかかったカールののように、柔らかい表情で俺に尋ねてきた。

「おはよう、森山」

俺はそんな彼女に笑顔で挨拶をする。彼女とのそんな些細なやり取りに、俺はなんとなく癒されてしまう。

今朝の一件は我が家の日常ともなりつつある光景の一つではあったのだが、それでもちよつと疲れはする。そんな中でこうした笑顔を見せられる、幾分気も晴れるというものだ。

「今朝は生徒会のお手伝いなかったの?」

「ああ。今朝はちよつと家で揉め事があつてさ」

「揉め事?」

もちろんイリヤの件だ。寝坊したまではそう問題とはならないのだが、それよりも部屋がセラにバレたことの方がマズイ。帰ってから何か言われたいのだから……

「もしかしてイリヤちゃんと何かあった？」

「——え？」

「あ、ううん！衛宮君のお家で何かあるとしたらイリヤちゃんかお手伝いさんのことかなあ——って……！」

慌てた様子で答える森山。

なんでわかったのか。俺がそんな表情でもしたのでだろうか。取り乱しながらも、俺に不快感を与えないようにと気を使ってくれているのがわかる。

「ありがとうな。気を使ってくれて」

「——！！」

俺が笑顔でそう言うと、森山はまるでボンと音を立てたかのように顔を真っ赤にする。

ああ、ちょっと失敗したかな。あまり気を使っていることを指摘されていい気はしない。ましてや、相手側に悟られないようにしていたなら尚更だ。

そう考えると俺の発言は失言だった。

「今朝もお手伝いさんと家事について揉めてさ」

俺は話を戻す様に口を開く。

「……あ、そうなんだ!!朝食をどっちが作るとか?」

未だに少し焦った様子を見せる森山。それでも、できるだけ調子を戻そうとしているのだろうか。胸に手を当てながら、まるで呼吸を整えるかのような仕草を見せる。

学園内でも男子から人気があり、後輩からは男女問わず慕われる森山奈菜巳。そんな彼女の仕草は俺でもかわいいとは思う。

「いや、今朝は皿洗いをして怒られた。自分が食べたものの片づけぐらいするんだけどな……」

「あはは……。お手伝いさんからしたら自分のお仕事が取られたくないんだろうね。衛宮君は家事がなんでもできちゃうから」

「む、そんなことないぞ。料理の腕とかまだまだだし、やっぱりお手伝いさんの方が家事全般でいったら手際がいいし」

「それでも普通の女子と比べたら相当だよ。お手伝いさんだって自分の居場所を奪われるような感覚になっちゃうんじゃないかな?」

「そういうもんかな……」

森山の言葉が胸に刺さる。

今まであまり考えてはいなかったが、セラは家のことを任されているんだよな。もちろん俺だって家を空けている親父に代わり、唯一の男として家を守っているつもりだが。

彼女からしたら、俺のそんな誇りと同じくらい家事を大きく見ているのだろう。

俺としてはセラには無理をしてほしくないし、何より普段頑張ってくれているのだから楽をしてほしいと思っっている。俺が彼女の苦労を少しでも肩代わりできればいいと思うし、何より俺自身が家事をするのが好きだ。

それでも、俺のそんなエゴが彼女の誇りを無碍にするようにしていたというなら考え物だ。

せめて彼女の当番の日ぐらいは手を絶対に出さないようにしよう。

「ありがとうな、森山」

「…………え？」

唐突なお礼に戸惑った様子を見せる森山。そんな様子が少しおかしくて、俺は表情を緩める。

「森山と話していなかったら、もっとお手伝いさんを傷つけていかもしれない。そう思ったらさ、こんな考えに至らせてくれた森山には感謝しなきゃいけないだろ？」

俺の言葉に再び頬を真っ赤にする森山。

……これも失言だったか？

「え、衛宮君——」

そんな森山が必死に絞り出すように声を出す。

揺れる瞳で俺を見つめる彼女を、やっぱり学園のアイドルなんだなと俺は再認識する。

「私は衛宮君の作るお料理好きだよ！だからさ、作る場所がなかったら私にご飯を作ってくれと………嬉しいなあ」

森山は顔を真っ赤にして、最後の方は消え入りそうな声でそう言った。

……そんな表情で言われてしまうと、こちらも変に気にしてしまう。

今度は失言しまいとぼりぼりと頬を掻きながら言葉を選ぶ。

「うむ。俺も衛宮の作る手料理は是非食べたい」

「——ひゃっ!?!」

突然の第三者の介入。森山は体を跳ねらせながら、それから距離を取る。

「おはよう、一成」

「ああ、おはよう。衛宮」

声の主は我が穂群学園高等部生徒会会長の柳洞一成だ。

彼はトレードマークとも言える眼鏡をいじりながら、横目で森山を見る。彼女はすっかり驚いてしまつてか、そんないつもの行動にビクリとしている。

少しかわいそうにも思うが、一成本人も悪気があつてしていることではないはずだ。男子ばかりの柳洞寺で育ち、その跡取りとなる彼は、あまり女性と仲良く接しているところを見たことがない。おそらく俺が知る限りでも、美綴と家の家族くらいだろう。同級生の女子が一人だけというのはなかなか問題だと思うが。

とにかくそれくらい女性付き合いが少ない一成だ。森山に対しても変な先入観を持って接しているのではないだろうか。俺としてはクラスは違つてもこうして会話をする仲なのだ。もう少し仲良くしてもらいたいのだが。

「さて、なにやら食事に関する話が聞こえた気がするが——」

「ああ、それなんだけど」

俺は事の顛末を簡単に説明する。セラとの揉め事とか、それに対して森山が気にしてくれた事。どこか気まずそうな様子を見せていた森山に対して申し訳ない気持ちは

あつたが、一成に対して変に隠し事をするのはよくない。そこそこ付き合いが長い俺が
そう言うのだから間違いない。

「なるほど——」

ふむと腕を組む一成。

目蓋を閉じ、瞑想を連想される行動を見せる。

「それに関しては彼女の言うとおりだと俺も思うぞ」

「……やっぱりか」

がくつとする。

俺自身森山と話してみてもその結論に至っていた。至つてはいたのだが、一成にも言わ
れると少し凹む。

「え、衛宮君……」

そんな俺の様子を心配してか、森山は声をかけてくる。

「なに、心配するな！料理をする場所などいくらでもある。どうだ？これからいつも我
が寺でその腕奮ってくれて構わんぞ！衛宮の料理は俺のお墨付きだ」

「——そうだよ！私も衛宮君に料理を教えてもらいたいし！！何より一緒にご飯作っ
てみたいかなあ……つて」

柄にもなく高笑いをする一成と対照的に消え入りそうな声でそう言ってくる森山。

そんな二人の姿に自然と笑みが零れる。

「ありがとう、二人とも。ただ、やっぱり俺はイリヤたちにも食べてもらいたいんだ」
そう、これは俺にとって譲れないもの。

昔、美味しくもない俺の料理を残さず食べてくれたイリヤ。そんな彼女の無理して作る笑顔ではなく、自然と零れる笑顔を見たかった。

そして俺があの家で初めて認められたものだから。……だから、できることならみんなが笑顔になるために料理をしたい。

それでも、セラと揉めてしまうなら、それもただの絵空事になってしまうのだけれど。

「まあそういうことなら、日々の昼食で手を打とう」

俺の様子を見て察したのか、一成は頷きながらそう提案をしてくる。

「毎日は無理かな。でも、昨日作っただろ?」

「ああ、昨日の竜田揚げは美味だった。冷めても美味しいとはああいうことを言うんだな」
「大袈裟だな。夕飯残りを使っただけだぞ」

「それでもしつかりと味が浸みていたのはしつかりと仕込みをしたからこそそのこと。翌日の朝食や弁当のことも考えていたのだろ?」

「まあそうだけどさ……」

こども評論家みたいに言われると、気恥ずかしい。

家でも食事当番が少ないため、作る日は本当に手間をかけて。それでいて、一成たちにも食わせることを考えて弁当にも生かそうとは思っている。

その点を評価してもらえたのは凄く嬉しいのだが。

「わ、私も衛宮君のお弁当食べてみたいなあ」

盛り上がる俺たちのせいで、蚊帳の外となっていた森山が申し訳なさそうに割って入ってくる。

頬を赤く染め、一成ほどずうずうしくはなく頼んでくる彼女。

「了解。次の食事当番の日は森山の分も作ってくるよ」

「ほ、ほんと!? ありがとう!!」

ぱあと輝く森山の笑顔。

いつも思うのだが、本当にいい笑顔で笑うよな。見ているこっちもなんだか嬉しい気持ちになっってしまう。

それが森山の良いところなのだろう。学園の男子や後輩たちが彼女を慕う理由がよくわかる。

こうして話も盛り上がっていると、チャイムが鳴る。

「む、ホームルームが始まるな。それじゃあ二人とも、また休み時間にもゆつくり話そう」

「あ、うん！授業頑張ろうね!!」

適当に手を振る俺と、ぱたぱたと一生懸命手を振る森山。一成と少しでも仲良くなれたことが嬉しかったのだろうか。そうだったら、俺としても嬉しい。

ふうと息を吐きながら一成の背中を見送る森山。

「一息ついているところあれなだけでさ、森山は席に着かなかくて大丈夫か?」

「ふえっ?」

俺の発言に一瞬フリーズする森山。しかしすぐに顔を真っ赤にすると、ぱたぱたと走って自席に戻っていく。

本当に、なんというか微笑ましいな。

interlude 2

「美遊・エーデルフェルトです」

教室に凜と響く声。自身を美遊と名乗った少女は初めて会った時と同じように、無表情でこちらを見ていた。

ああ、やっぱりこうなったか……

イリヤはあまりにもベタだが、なんとなく予想がついていた光景に苦笑いを浮かべていた。

『なるほど、転校生展開ですか。なんともベタですなー』

イリヤの耳元で囁くルビー。これもまた、イリヤと同様に予想をしていたのだろうか。動揺などは一切見せない。むしろ、どことなく楽しそうにも感じられるのは、ルビー自体の性格故だろうか。

「席は窓際の一番後ろ。イリヤちゃんの後ろね」

「えっ!？」

いつもの能天気な調子で言うイリヤの担任である藤村大河。

イリヤはこの時ほど切実に自分の席を、そして何も察してくれなかった先生を恨んだことはなかっただろう。

ゆつくりと足音を立てながら、イリヤの方に歩いてくる美遊。もちろん、それはイリヤが勝手に感じていることだが。美遊からしたら、ただ先生に指定された席に着こうと

しているだけだ。

「……………」

「……………!!」

すれ違いざまに横目で見られた。

なぜだろう。その目に威圧されたイリヤは、ビクリと体を震わせていた。

『あらら。すっかり萎縮しちゃってますね』

呆れたように、それでいて主のことを案じる様子を見せるルビー。

イリヤはそれに答えることはなかった。

ただ、その脳裏にあるのは昨晩のこと。美遊との初めての出会いであり、そしてイリヤにとって初めての戦闘だった。

「お、ちゃんと来たわね」

黒髪ツインテールを揺らしながら、イリヤの姿を確認した遠坂凜は満足そうな表情浮かべる。

対するイリヤはというと、ピンクを基調としたかわいらしい恰好とは対照的に、げっ

そりとした表情で凜を見る。

「そりやあんな脅迫状を出されたら……」

断れるはずがない。

イリヤは必死に表情で訴えるが、凜には届かないでいた。おそらく凜にとって、あれは脅迫状という感覚はないのだろう。

無自覚だからこそ恐ろしい。

見た目こそ整っており、猫さえ被っていれば学園でも指折りの人気を得るだろう。

遠坂凜から手紙をもらった。男子ならば、間違いなく胸を躍らせるはずだ。ただ、その内容が無自覚の脅迫状だったとなれば、その人の心はどうなるだろうか。

イリヤ自身、内容を見るまではもつと明るいことが書かれているだろうと胸を躍らせていた。現実はその優しいものではないのだけれど。

「つてか、なんでもう転身しているのよ？」

げつそりとしたイリヤを置いておき、凜はその派手な格好に首を傾げていた。

「さつきまでいろいろと練習したんですよー。付け焼刃でもないよりはマシかと」

「へえ……。殊勝ね」

イリヤの手の中で握られているルビーは元気にそう答える。

右も左もわからないイリヤを戦場に連れ出すのだ。せめて命を守る手段くらいは用意させておくのが当然だろう。それに関しては凜も納得していた。

しかし昨日から勝手に引つ張られてばかりのイリヤ。彼女は不満以上に不安を持っていた。

ついこの間までは普通の小学生をしていたイリヤ。それが一本のステッキと黒髪ツインテールとの一方的な契約のせいで一転した。

魔術師と魔法使いの作った礼装。

イリヤにはその本質的な意味を理解することはできなかつたし、むしろその表面的なものもどれほど理解できているのか不明だった。

ただ、自分はルビーと契約することで魔法少女となることができようになった。それはいつも見ているアニメの中だけの存在だと思っていたファンタジー。

少しイメージとは違ったが、魔法を使って、空を飛んで、敵と戦って——それから、恋をして。

そんなアニメのような現実に飛び込めたことに、少なからず楽しさを抱いていた。そしてそれと同じくらい、こんな深夜に呼び出され、戦いを行うと告げられたことに、不安もあつたのだ。

「準備はいい?」

凜がイリヤに尋ねる。

その迷いも何もない、ピンと張った背中のように真っ直ぐな彼女の眼に、一瞬戸惑うイリヤ。

戦いになればまともにできるかもわからない。それでも、ルビーと契約をしている自分にはかできない。明らかに自分よりも強い凜ですら頼ってきている。

「う……うん!」

自身を奮い立たせる。

未だに抜けない不安もあるが、凜はできる範囲でサポートしてくれると言った。ルビーともそれなりに特訓を行い、最低限でできる準備はしたはずだ。

——よし。

イリヤは気合を入れる。

「カードの位置はすでに特定しているわ。校庭のほぼ中央……歪みはそこを中心に観測されている」

凜とイリヤは並び、校庭の中心に目を向ける。

しかし、そこには特別変わった点など見られない。強いて言うなら、昼間の学園しか

知らないイリヤにとっては、月明かり以外に一切の灯りがないことこそが変な点だった。

「中心って何も無いんだけど……」

「ここにはないわ。カードがあるのはこっちの世界じゃないわ。ルビー」

「はいはい」

凜の声に応えるルビー。

「それじゃあいきますよー」

「わっ!？」

ルビーの掛け声と共に地面には大きな魔方陣が浮かぶ。

イリヤにはその魔方陣の意味はわからなかったが、これが魔術の類であることだけはなんとなく理解できた。

「半径二メートルで反射路形成！境界回路一部反転します！」

音を立て、歪んでいく世界。

「えっ……な……何をするの？」

何もできず、ただ淡々と目の前の光景を受け入れるのみとなっている状況に、イリヤは強く不安を抱く。

「カードがある世界に飛ぶのよ」

そんなイリヤとは対照的に、凜は落ち着いた様子で答える。

「そうね……。無限に連なる合わせ鏡。この世界をその像の一つとした場合、それは鏡面そのもの——」

ぐるん。

世界が反転する。それは比喻ではなく、物理的に。イリヤは間違いなくそう体感していた。

「鏡面界。そう呼ばれるこの世界にカードはあるの」

イリヤは驚きを隠せないでいた。

今まで自分の生きてきた世界に対し、何の疑問も抱くことはなかった。そこには当たり前のように大好きな友人や家族がいて、遊ぶ場所、勉強する場所、帰る場所がある。

ましてやアニメのように魔法が存在して、悪の組織とかそれと戦う正義の味方があるなんて当然思っていなかった。

それが一転、自分が魔法少女になったただけではなく、自分が思ってきた日常にこんなものが隣合わさっているなんて想像もしていなかった。

「な、なに……この空？」

胸がざわつく。

イリヤは空だけではなく、この世界全てに対する違和感に動揺していた。魔術師でもない彼女がそう感じるほど、この鏡面界は異常だった。

「詳しく説明している暇はないわ！カードは校庭の中央。構えて！」

凜の声が響く。

次の瞬間、校庭の中央の空間が歪む。そして、*“それ”*は姿を現した。

まるで蛇を連想させる体のしなやかさで這いずり出てくる。ゆらり、紫色の長い髪の毛を揺らし、長身の女性はいりやたちと対峙した。

「報告通りね……実体化した！」

凜の言葉は少し強めになってくる。

彼女もまた、この異常性を理解し、それに飲み込まれまいと必死に努めているのだ。

——常に優雅であれ。

幼い頃から遠坂の家訓とし、彼女が生きる柱としてきた言葉だ。今もそれを打ち立て、目の前の敵をにらみつける。

「くるわよ！」

それは動く。

凜は地面を蹴り飛び上がる。そしてイリヤはただ後ろに下がりながらその一撃を避

けた。

「Anfang………!!」

凜は宝石を三つ手に持つ。

彼女は魔術回路に魔力を流し、宝石に込められた力を開放する。

「爆炎弾三連!!」

凜の手から離れえた宝石はまるで爆弾のような火力をもつて敵にぶつかる。

激しい音と共に煙が上がる。

「——ッ!!」

煙が晴れ、そこに広がる光景に絶句する。

敵は相変わらず無表情でいながら、傷一つついていない。

もちろん凜もこの一撃で敵を倒せるなど一切思っていない。それでも、中位の宝

石を三つも使用したのだ。多少の傷があってもいいのではないかと思う。

「やっぱり魔術は無効か……」

舌打ちをする。

これもまた報告通り。敵は対魔力Bランク以上を保有している。魔術を無効にするほどのその能力に、まず魔術師は勝つことはできないだろう。……それでも、凜がおりつただけの宝石を使えばあるいはどうにかなるかもしれない。

無論、この先にある戦いも踏まえればそれは賢い選択ではない。

「それじゃ後は任せた!!」

「ええっ!! 投げっ放し!?!」

ぎゃーと騒ぐイリヤ。

凜だつてその不安なのはよくわかる。あんな化け物を目の前にして、一人戦わせられるのだから。

だが、彼女には戦う術がない。元々、あれと戦うために渡された礼装も今はイリヤの手の中にある。実質、現状において唯一の戦闘手段はイリヤが持っていることとなるのだ。

一般人は巻き込まないと決めていただけもあり、凜は現状を酷く呪った。

「イリヤさん!! 二撃目来ますよ!!」

ルビーが叫ぶ。

いくらこちらが作戦会議をしたくても、相手は待つてくれるはずがない。

敵は鎖に繋がれた、鋭利な先端を持った杭をイリヤ目がけて投げってくる。イリヤは咄嗟に身を振りながら敵の攻撃を躲す。

「か、かすった! 今かすったよ!!」

痛みこそは感じなかった。それでも、間違いなく命を奪うことができる敵の武器が自分に刺さろうとしたのだ。

一瞬で血の気が引く。

「接近戦は危険です！まずは距離を取ってください!!」

「キヨリね！そうね、取りましょう。キヨリ!!」

涙を浮かべながら、こくんこくんとルビーの提案に首を縦に振る。

敵は再び武器を構えると、今度は横一線に薙ぎ払ってきた。イリヤは危なそうにもそれも避ける。

「キヨリ——!!」

そしてそれだけを叫びながら全速力で走り出す。

彼女は今まで五十メートル走なら誰にも負けなかった。この瞬間に出したタイムは、おそらく今までのどれよりもいいものだっただろう。

「落ち着いていきましようイリヤさん！」

「む、無理だつて!!」

ぶんぶんと首を横に振るイリヤ。そんな未熟な主をどうしたものかと思いつながらも、凜よりもイジリ涯があると内心微笑むルビー。

「とにかくキヨリを取ってください。そうしたら魔力弾を撃ち込むのが基本戦術です！」

魔力弾は先程練習した通り!!」

「練習って言ったって——」

イリヤはつい先程までのルビーとの特訓を思い出す。

前半はルビーがイリヤをイジリ倒す。彼女が秘かに恋心を寄せる士郎との馴れ初めであつたり、夕飯での出来事であつたりなど。戦いには一切関係のない内容が主で、ルビーの趣味としか言えないものばかりだつた。後半になつてようやく魔力弾についての説明はあつたものの、実際に使つたのはほんの数発。実戦で扱うには不安しかなかつた。

それでも、このまま逃げていると埒があかない。

「——あああああ!!!」

イリヤは叫ぶ。

ギユツとステツキを握りしめ、振り返る。その先には相変わらずの不気味さで立つている敵。今にも逃げ出したい気持ちはあつたけれど、このままでは変わらない。

「攻撃のイメージを固めてステツキを振ってください!!」

ルビーの言葉のとおり、イリヤはイメージをする。

十分に開いた間隔、それを埋めて敵に一撃を浴びせる。

イリヤはそれをどうしてもイメージすることができなかつた。しかし、普段から観て

いるアニメは、それを安定させるのに十分な媒体だった。

「どーにでもなれーッ!!」

ステツキが光る。

イリヤがルビーを振りぬくと同時に光り輝く。そして数発の巨大な弾丸が横一文字に放たれる。

撃った本人さえ呆気にとられる中、敵は爆音と共に魔力弾をその身に受ける。

僅かに境界に風が吹く。立っていた煙はそれに流され、ゆらりと敵は姿を見せる。魔術師としての才覚、実力共に一級品である凜の魔術を受けても尚無傷だったそれは、イリヤの魔力弾によって明らかに負傷をしている。彼女が素顔を隠す仮面の横から流れる血がそれを証明していた。

「やっ——!!」

「よっしやあああ!!効いているわよ!!!」

遠くで叫ぶ凜。

イリヤはその様子に自分が放った魔力弾に対する驚きはあった。しかし、だいぶ遠くにある安全地帯で叫んでいる凜になんとも言えない気持ちになったのがそれ以上。ルビーに至っては情けないと、かなり呆れた様子だ。

「とにかく追撃です！相手は人ではありませんので遠慮はいりませんよ!!」
「う、うん!!」

ルビーの声に答えるように、イリヤはステッキを構えなおす。こんな状況を殺伐としたものと思いつつも、少しずつ憧れの魔法少女に近づいてきたことに興奮の色をイリヤは見せる。

その様子から再び攻撃がくることを察したのか、敵はピクリと動く。

「いつけえ!!」

再び放つ魔力弾。それは残像を残す勢いで走り出した敵に当たることなく、無情に土埃を立てるだけ。

「すばしっこい!!」

次々と魔力弾を放つイリヤ。そのどれもがまるで一撃目が嘘だったかのように敵に当たることはない。別にイリヤの射撃力が弱いわけではない。ただ敵が速いというだけ。

しかし年相応か、あまりにも攻撃が当たらないことに苛立ちを感じ始める。

「イリヤさん、砲撃タイプでは追い切れません。散弾タイプに切り替えましょう。イメージできますか？」

状況を判断してすかさずアドバイスを入れるルビー。性格に難があるルビーだが、戦

いとなれば機転が効く高ランクの魔術礼装であることは間違いなかった。

「やってみる!!」

そんなルビーに答える幼いマスター。彼女もまた、まるでどうすればいいのか、その結果を知っているかのようにルビーに魔力を籠める。

イメージするのはいつも観ている魔法少女の使う技。イリヤにとつての魔法少女という認識はアニメの中のファンタジーである。

非科学的ではあるが、想像を力の元とする魔法少女にとつて、イリヤの認識はいい方に傾いているのは間違いない。

「特大の——」

イリヤはステッキを両手で握り、ブアツと上に掲げる。

「散弾!!」

魔力が弾ける。いくつもの魔力弾が激しい音を立てながら、校庭一帯に雨のように降り注ぐ。

魔術はもちろん、戦闘に関して初心者であるはずのイリヤ。そんな彼女が当初の凜の想像を上回る能力を見せたことに、凜とルビーは素直に驚いていた。

「や………やった?」

「いえ。おそろく今のでは——」

さすがに疲労の色を隠せないイリヤ。それに対し、ルビーは言い難そうに言葉を濁す。

「バカ！範囲を広げすぎよ!!あれじゃあ一発当たりの威力が落ちる!!」

凜の罵声が響く。いくら想像以上の実力を見せたところで、イリヤは初心者だ。状況判断、行った方法に対する結果の予測能力が圧倒的に鈍い。

イリヤはビクリと肩を震わしながら、砂煙が消える校庭に目を向ける。そこには確かに負傷はしているが、未だ健在である敵の姿あった。

反撃に備えなきや——

イリヤは未熟ながらも、咄嗟に状況判断を行う。

「え……っ？」

しかし状況は最悪。イリヤではどうしようもない危険という認識をする程度しかできなかつた。

ゆらりと揺れる体からはまるで冷氣でも出ていると錯覚させるほど、冷たい魔力が流れ出す。そして目の前に現れる一つの魔方陣。血で描いたようなそれに、イリヤはどうしようもない恐怖を感じる。

「“宝具”を使う気よ!!逃げて!!」

「——イリヤさんっ!回避です!!」

再び飛ぶ凜の罵声。それから少し遅れたタイミングでルビーも焦った様子でイリヤに言い放つ。

「ど……ど……!!」

イリヤも本能以理解していた。あれは危険すぎる。逃げなきゃいけない。

それでも、この隔離された世界で宝具のから逃げ切れる場所などあるのか。

「とにかく敵から離れてください!!」

ルビーは主を引つ張るように、パタパタと羽を動かす。それでもどうしていいのかわからないイリヤあたふたとするだけ。

その様子を見ながら凜は舌打ちを打つ。それは未熟なイリヤに対するものか、それともそんな彼女に任せることしかできないなかった自分を情けなく思ってたか。

それまで遠くで見ることしかできないでいた凜は宝石を握りしめると、物陰から飛び出していく。

「早くこつちへ!ダメもとで障壁を張るから!!」

「間に合いません!全魔力を魔術障壁、物理保護に変換します!!」

走ってくる凜に縋る様な眼差しを向けるイリヤ。それに対し、ルビーは淡々と状況判

断を進める。未だに未知数である敵の宝具。それを優秀とはいえ一介の魔術師である凛が防ぎきる補償もない。それならば、魔法使いが作り出した礼装である自分が作った障壁のほうが高確率が高い。

あくまでもルビーはイリヤが扱う礼装として判断を下す。

二人の間で交わされた契約のおかげもあり、イリヤの魔力は強制的にルビーに吸い上げられる。とても一般家庭の出身とは思えないイリヤの魔力量は、十分に障壁を張るだけのものとなる。

「耐えてください、イリヤさん!!」

「え? ええええええ!!??」

未だに状況が掴み切れないイリヤ。どうしようもないできない自分、本気で焦る凛と先程までとは異なつて真面目な声を出すルビー。そして禍々しい雰囲気纏い、空間そのものが歪む様な感覚に、ただマズイということだけは理解する。

「騎英の——」

その真名が口にされる瞬間だった。

「クラスカード『ランサー』。限定展開」

それまで聞いたことのない声が小さく響いた。

「刺し穿つ——」

ガリツと金属が地面を削る音がする。それにより、真名を口にしようとしていた敵はそれまでいなかったはずの者の存在に気付く。

だが、それでは遅かった。

「死棘の槍!!!」

赤い槍が心臓を穿つ。

それは決められた事象であり、真名を口にして槍を放てば必ず心臓を貫くのだ。だからこそ、彼女がその名前を口にした瞬間に反応しようとしたのでは遅かったのだ。

「——!!!」

蛇のような動きを続けた敵は声にならない叫びをあげる。それでもすぐに死ななかつたのは、彼女が英霊故なのかもしれない。

その様子を驚くのは凜とイリヤだけ。

二人はそれまで絶体絶命の状況下に立たされ、その緊張が抜けぬまま事の顛末を見届けることに酷く動揺していた。

「ガハッ……」

まるでそれが最後の断末魔だったのように、敵は血を吐くと力なく倒れる。そして一瞬の発光の後、一枚のカードとなる。

「対象撃破。クラスカード『ライダー』回収完了」

そのカードを手に取り、一人の少女はイリヤたちの方を向く。

「え……、誰？」

少女は一人、黒髪の毛を揺らしながら感情の読めない瞳をイリヤに見せる。彼女の手には一枚のカード、そして一本のルビーと似た青いステッキがあった。

それが彼女、美遊・エーデルフェルトとの最初の出会いだった。

そんな彼女との再会もどことなく予想のできていたイリヤ。それも美遊が自分と同じ魔法少女で、魔術師のもとでカード回収の任を引き受けていることを知ったからだ。

……予測はできていた。それでもどことなく雰囲気合わなく感じてしまったせい
か、気まずさを隠せないイリヤ。

その日のホームルームはやけに長く感じられたイリヤだったのだ。

「すまん、結局こんな時間まで付き合わせてしまつて」

夕日が空を真っ赤に染めた頃、一成は生徒会室に帰ってきた。彼は申し訳なさそうに俺に頭を下げると、早速備え付けの冷蔵庫から麦茶の入ったペットボトルを取り出す。

「気にするな。相談に乗ってもらつたお礼と思えば安いくらいだ」

俺は首から垂らしたタオルで額の汗を拭くと、使い終わった工具をしまつていく。

「いや、それは友として当然のことをしたまでだ。これに關してはそうはいくまい」

「そうか？俺としては困つた人を——いや、一成だからこそ手を貸したんだぞ」

「……むう、そうか」

俺の笑顔のせい、少し気まずそうに一成は俺の言葉を受け止める。

「それでも、これぐらいの感謝は受け取れ」

「ああ。見返りは求めているつもりはないけど、お礼ならいくらでも受けるさ」

冗談交じりのやり取りをしながら、俺はグラスに入った麦茶を受け取る。

本当ならゆつくりと飲むべきなのだろうけど、あいにく喉が渴いていた。俺は一気に

それを飲み干すと、氷の音を鳴らしながらグラスをテーブルに置く。

「とりあえず頼まれていた分の扇風機は直しておいた」

「おお！本当か!!」

「ああ。一応確認してみてくれ」

頬を緩める一成は俺の隣に並べられる扇風機のコンセントをさす。そしてスイッチをオンにし、その動作を確認すると次の物へ。それを四台全て行うと満足そうにうなずいた。

「確かに確認した」

うむ、と頷き再びお礼の言葉を口にする。お礼の言葉を言われて嬉しくない、などと捻くれた性格のつもりない。ただ、こうも何度もお礼を言われるとむず痒いものもある。

「直したといってもほとんど応急処置だからな。今年の夏で最後だと思ってくれよ」

俺は気まずそうに頬を搔き、一成の言葉を遮る。

「ああ、構わん。なんとかこの俺が任期を全うするまでの間に、現状を打破すればいいのだから」

それでも腕を組みながら自信満々に語る彼の様子に、俺は自然と笑みを浮かべてい

た。

この街にあるお寺の息子さんで、気難しい生徒会長だと思われがちな一成。事実、規律は重宝するのだから、一般生徒からはどこか近寄りがたい雰囲気もあるのかもしれない。それでも生徒会長としてみんなから慕われているのはその行動力にあるのだろう。生徒の声に耳を傾け、学園に掛け合うことができる。それこそが一成の魅力だ。

事実、こうして学園の備品を直し、運動部にばかりお金を回す学園の運営に異論を唱え、運動を行っている。そんな姿を見ているからこそ、俺もこうしてできる形で協力をしているのだろう。

元々親父の影響か、損得勘定であまり動かに俺だが、一成なら学園をいい方向に導いてくれる期待しながら手伝いをしている面もあった。

「どうだ、もう一杯飲んでいくか？」

空になった俺のグラスに視線を向けながら一成は尋ねてくる。

「ありがとう。せっかくの提案だけど、今日は遠慮しておく」

俺は軽く手を合わせると、荷物を纏める。

「今日は衛宮の家で藤ねえと桜と約束があるんだ」

「なるほど。ということ、夕飯は衛宮が作るのか？」

「……明日の昼飯に期待しているのか？」

「ああ。今朝の約束でもあるしな」

心底嬉しそうに笑う一成。寺の子がこんなにも物欲を丸出しにしているのか少し不安になるのだが、制限ばかりされてきているのだから、ストレスもたまるのだろう。

「了解。とりあえずあまり期待しないで待っていてくれ」

「わかった。明日の昼は生徒会室集合だ」

「……」

本当に分かっているのか不安な一言だ。

生徒会室を後にした俺は廊下歩いていた。

決して広すぎるとは言えない高等部の校舎。それでも、こうして毎日多少のめんどくささを感じながら歩いている。

開いた窓の外からは、放課後の部活動に励む生徒の声と蝉の鳴く声が聞こえてくる。運動場ではおそらく陸上部などが活動に勤しんでいるのだろう。夏休みも近づき、大会も控えているのだろうか。

「……帰りがけに少し顔を出してみるか」

今日は足を運ぶ理由があるのだ。……少しくらいはいいだろう。
一人そんなことを考えていると、不意に一人の少女が目に入る。

「失礼しました」

彼女は頭を下げながら、ゆっくりと職員室のドアを閉めた。

黒い長い髪の毛を左右で縛り、真新しい制服を着る女生徒。凜としたその姿に目を惹かれたいのだ。……つまり不本意ながら、俺もそんな彼女に目を奪われていたのだ。

「——あ、」

彼女は振り返り、そんな俺に気付いた。

「……久しぶりだな、遠坂。日本に帰ってきてたんだな」

俺は浅く笑い、それまでの心情を察されないよう彼女にそう言った。

そんな彼女は夕日に染められてか、心なしか赤く見えた。

「……ええ。一年ぶりくらいかしら、衛宮君」

彼女もまた浅く笑いながら俺の名前を口にした。

彼女、遠坂凜と最後に会ったのは穂村原学園中等部を卒業した日だ。

冬木市に住んでいる人なら、その大半が中等部からそのまま高等部に上がる。遠坂ももちろんそれに当てはまると俺は思っていた。しかし、彼女は高等部の入学式に姿を見せることはなかった。後に聞いた話によると、単身

外国に渡つて勉学に励んでいるらしい。

そんな遠坂との再会は思いの外偶然で、俺の思考は気の利いた一言を口に出せないでいた。

「なあ——」

「ごめんなさい。まだ時差ボケのせいで眠いの」

意を決して言葉を口にしようとしたとき、遠坂は申し訳なきような表情を浮かべて俺の言葉を遮る。彼女は頭に手を当てながら、少し辛そうに笑う。

……当然だ。俺と遠坂では決定的に住んでいる世界が違う。それを理解してか、お互いに昔からその線引きをしてきたはずだ。面識はあつても中学生の頃に話した記憶はそうなく、挨拶を交わす程度だった。

「そ、そうだよな。ごめん」

「私の方こそ。当分はこっちにいるから、またゆっくり話しましょう」

遠坂はそれだけを言うと、俺に背中を向けて歩き出す。

「遠坂！」

なぜだろう。こうして大声を出すこと、呼び止めることを拒絶したはずの遠坂に対してこのようなことをしたのは。

衝動に任せるな。常に冷静に判断をする。それが大切なことだと俺は知っているはずだ。

それでも、自然とこうして声を上げてしまっていた。

俺の声をどう思ったのかはわからないが、遠坂はその足をゆつくりと止める。振り返りはしないが、彼女は確かに俺の言葉を待っている。

……マズイ。衝動的に叫んでしまったせいで、何を言っているのか纏まっていない。

「……また明日な」

だからこそこれもまた衝動的に出た言葉だ。

また明日——

この言葉ももう二度と言えないかもしれない、そう思っていた。しかし、こうして帰ってきて、再び同じ学園に通うことになったのだ。

さすがにこれはまずかった。遠坂の反応がない。

体中から血の気が引いていく。

「……ええ。また明日ね、衛宮君」

遠坂は振り返ることなく、それだけを口にすると歩き出していった。

……怒っていたらどうか。

不安になるが、終わったことだ。仕方がない。

俺はため息をつくとき、その場を去る。

遠坂との再会の後、立ち寄ったのは高等部にある弓道場だ。つい半年前までは毎日通っていたこの場所も、弓道部を辞めて以来久しぶりに来た。

俺がこの場所を避けていた理由はいくつかあるが、こうして足を運んでみてわかることがある。なんだかんだでこの場所に対する未練は少なからずあるらしい。

俺は苦笑いを浮かべながら、それまでのもやもやを塗り固める。

ゆっくりと弓道所の戸を引く。

その先は独特な雰囲気広がっていた。まるで糸をピンと張ったような緊張感。わずかに鼻に残る匂い。校庭で活動している運動部とは異なり、大きく騒ぐことはない。

——懐かしい。

俺は自然とそう感じていた。

「——衛宮？」

不意に声をかけられる。

「お疲れさん、美綴」

俺は優しく笑みを浮かべながら、声の主に手を振る。

俺に声をかけてきたのは次期弓道部主将美綴綾子。次期といったのも、この夏をもって卒業をする先輩を除けば、最も弓がうまく、人望に長ける人物であるからだ。それに關しては、そこそこ付き合いの長い俺はよく知っている。

「なんだい？ようやく弓を持つ気になったのか？」

少し興奮気味に俺に詰め寄ってくる美綴。それに若干気まずさを感じてしまう。遠坂とも森山ともまた違った雰囲気を持つ美綴。彼女もまた美人の類に入るのだから、それに対してもう少し自覚を持って行動をしてもらいたい。

「いや、今日は桜に用があつてだな——」

「美綴先輩！何やつてるんですか!？」

わっと叫び声上がる。弓道場に似合わない光景だと思つたら、慌てた様子でこちらに走ってくる女生徒が一人。

「別に横取りをするつもりはないんだぞ、間桐」

「よ、横取りとか何言っているんですか!？」

「いや、深い意味はないさ」

けらけらと笑う美綴と今にも飛び掛かりそうな様子の桜。

「ただこれくらい鎌をかけないとこのバカは気づかないだろ？」

「いや、そういう問題じゃなくて——」

「そうだぞ、美綴。人に指をさしてバカとか失礼だ」

「……………」

一気に二人から白い目を向けられる。……なんでさ。

俺が頭が痛そうに手を当てていると、もう一人部員がこちらに歩み寄ってくる。

「おい、何をやってるのさお前たち」

少し鼻につく声を上げる男子生徒。彼は明らかに苛立ちの様子を前面に出しながら、

俺たちに迫ってくる。

「……………兄さん」

それに萎縮した様子の桜。彼女にとって兄である間桐慎二は恐怖の対象でもあった。

だからこそ俺と美綴は二人の間に立つ。

「こっちは大会前の調整段階だ。僕はもちろん、先輩たち、それに美綴もね」

「……………」

慎二は間違えていない。むしろ正しい。きっと俺も慎二の立場なら、注意をしたに違

いない。

「すまん、俺が軽率だった」

頭を下げる。そう易々と頭を下げることはしてはいけないのはわかっているのだが、今回は俺が悪いのは明白だ。それに慎二の性格を考えれば、下手に食いついても喧嘩になるだけだとわかつている。

何か言いたげな様子の桜と美綴だが、二人も慎二の言っていることを間違えだとは言えないのだろう。

「わかればいいんだよ、わかれば」

ぱたぱたと手を振る慎二。自分が優位な立場だと理解してか、機嫌が良さそうだ。

「とりあえず俺は帰るよ」

本来の目的は果たせていないが、ここで火に油を注ぐわけにはいかないだろう。夕食の献立は二人が好きなものを選べば外れることはないはずだ。

「待てよ、衛宮」

「———なっ!？」

不意に肩に重みがかかる。それが慎二が俺に肩を組んできたことだとわかるまでに多少時間がかかった。

慎二は不敵な笑みを浮かべながら、俺に顔を近づける。

「——気づいているか？」

「……………え？」

笑みを浮かべる奥、慎二の瞳は普段見せないくらいに真面目なものだった。

それは俺の答えだけではなく、すべての反応を見ようとしている。一挙一動、余すことなく観察してその本質を見定めようとしている。

あまりにも突発的なことで、多少面食らった。それでも、彼がそれを望むなら——

俺はそんな慎二から目を離さない。

それから僅かの後、慎二はふっと笑った。

「そうかい。まあそれならいいんだ」

急に肩から重みが抜ける。慎二はけらけらと笑いながら、数度俺の背中を叩く。

「衛宮も程々にしておけよ？ じゃないと痛い目見るぜ」

「……………ああ。慎二も大会を控えているんだろ？ そっちに集中してくれよ」

「そうさせてもらうさ。とにかく今日みたく部活中に遊びには来るなよ」

「……………悪かったって」

慎二の軽口に俺は頭を搔く。

これ以上ここにいても迷惑になるのは間違いないし、そろそろ帰ろう。

美綴と桜、部員のみんなに迷惑をかけたことは申し訳ないと思っっている。この後慎二に何かされないといけないのだから。

キツチンに醤油の香ばしい香りが広がる。

「……………」

火の通りは十分。これ以上火入れず、余熱を使っておけばいいだろう。

俺は満足そうに笑うと火を止める。

落とし蓋を開けたことで広がったのその香りは、本日一番力を入れた煮物のものだ。和食の定番と言えばその通りなのだが、その実手間がとてかかる料理である。それに比例しておいしさも増すのだからとても奥深い。

今晩は和食をメインにいくつか料理を用意している。美味しければ何でもいい藤ねえと違って、桜は洋食が好きと明確なものがある。弓道場に立ち寄ったのも彼女のリクエストを聞ければと思ったためである。ただ、それも叶わなかったので洋食で桜の好みを抑えるか、和食で俺の腕を存分に披露するかというものとなった。

結果として今日は俺が最大限におもてなしをするという結論に至った。そのため、こうして和食を主体として他にも食べやすい料理をいくつか用意した。しかし求める料理の量と質に反して時間があまりにも少なかった。煮物ももう手間をかけたかった

のが本音である。

とにかく二人とも気に入ってくればいいのだが。

「ただいまー!!」

屋敷全体にバカ見たく大きな声が響く。

「お、お邪魔します」

今度は少し遠慮がちなものだ。

こどもも差があれば誰でもどちらの声なのかわかる。

けたたましい足音がリビングに近づいてくる。このドタバタ感覚があまりにも懐かしくて、俺はついつい笑みをこぼしてしまう。

「ただいま、士郎!」

派手な色の髪の毛と服を揺らしながら藤ねえはやってくる。それに少し遅れて制服姿の桜が顔をのぞかせる。

「おかえり、藤ねえ、桜」

俺は調理を続ける手を止め、二人に笑いかける。

「お邪魔します、先輩」

やはり少し固い桜。藤ねえ程とは言わないが、もう少し気を崩していいと思う。まあ

これが桜のいいところであるのだが。

俺が苦笑いを浮かべていると、ここが自宅と言わんばかりの様子で藤ねえはずかしくキツチンまで来る。

「わあ！美味しそうな匂い!!」

「夕飯までもう少しかかるから、まずは手を洗ってきなさい」

これではどちらが年長者かわからない。

藤ねえは少し不満そうな表情を見せながらも、渋谷洗面所に向かう。

「桜も部活上がりで汗かいただろ？風呂は沸いているから、汗を流してきたらどうだ？」

「えっと、でも——」

「料理なら任しておけ。久々に二人に振る舞うから頑張つて作ってるんだ」

「……それじゃあ頂ますね」

ぺこりと頭を下げる桜。

先に風呂を沸かしておいて正解だった。やっぱり女の子の子は汗の臭いを気にするものだろう。俺は割とガサツな方だが、夏場の弓道の大変さはよくわかってる。

藤ねえは言わずもながら、頑張っている桜も腹を空かせているに違いない。

「——さて、それじゃあ仕上げますか」

「おいしかったー!!」

あれほどあった料理をすべて食べた藤ねえはごろんと寝転がる。

「藤ねえ、行儀が悪いぞ」

「えー、いいじゃん。お姉ちゃんは今日も一日頑張ったんだから」

そう言いながら手近に置いておいたりモコンでテレビ電源を着ける。

今は夏場だからいいのだが、冬になってこたつを出したら絶望的だろう。十中八九藤ねえはこたつから出ようとしくなるに違いない。強いて言うなら、食事係で俺が呼び出される回数も増えることとなるだろう。

それ自体はまだ気にすることではないのかもしれないが、一番心配なのは藤ねえが大人として大切なものを失わないかだ。牙を抜かれた虎とはよく言ったものかもしれない。いつも思う。

「先輩、お片付けは私がやりますよ」

食器を重ね、シンクに運ぼうとしていた俺に桜は提案する。

「お料理は結局お手伝いできませんでしたから。せめてこれくらいはやらせてくださいよ」

「……じゃあ頼むよ」

「はー!」

俺の返答に嬉しそうな表情を見せる桜。少しあわただしそうにしながらも、食器を手に際よく運んでいく。

本当に家事が好きなんだろう。慎二もつくづくいい妹を持ったものだ。……イリヤもいつかこんな風に手伝いをしたがるようになるのだろうか。だとしたら凄く嬉しい。……ただ、その時はセラと揉めそうな気もするけど。

「ああ、そういうえば——」

ごろんと寝返りを打ちながら藤ねえはこちらを向く。

「おいしい料理と言えば今日うちのクラスに転校生が来たのよ」

「転校生？」

藤ねえは頷く。

転校生という言葉聞き、一番に思い返したのは遠坂の姿。あれも一応編入の手続きとかそういうものだったのだろう。

まあ藤ねえのクラスと言えば小学生なのだが。

「なんか不思議な女の子なんだよね。雰囲気は同世代とは違うっていうか……」

ううと唸る藤ねえ。学校で何かあったのだろうか。渋い表情からして、そういうものではなかったのではない気がするのだが。

「藤ねえのクラスってことはイリヤと同じクラスか」

「そうそう！イリヤちゃんならうまく打ち解けてくれるかな、って思っていたんだけどね。どこか警戒しているというか、なんか萎縮しているような感じなのよね」

「珍しいな。イリヤが……」

俺も藤ねえ同様表情を少し険しくする。

兄貴という鼻厖目を抜きにしても、イリヤは人当たりがよく、友人に囲まれやすい性格の良い女の子だ。まあ純粹すぎる心を持つているから、危ない目に遭わないか少し不安にも思ってしまうが。

そんなイリヤがそうなってしまうのだから、俺としては珍しく思えてしまう。

「とにかくうまく打ち解けてくれるといいんだけどね。イリヤちゃんはもちろん、クラスのみんなども」

困ったような、それでいて優しそうに笑う藤ねえ。普段は教師らしいなんて一切思えないけれど、こういう表情を見ていると去年まで彼女にお世話になっていた高等部の人間が未だに彼女を親しんでいることに頷ける。先生であり、お姉ちゃんである藤ねえ。なんだかんだで教師が天職なんだと思ってしまう。

「今日はありがとうございました」

ぺこりと頭を下げる桜。その隣、眠そうに欠伸をしている藤ねえの姿に苦笑いをこぼす。

「こつちこそ。今度は桜の料理を楽しみにしているよ」

「はい！先輩の舌を唸らしてやりますよ!!」

ぎゅつと力強く握り拳を作る桜。出会った頃はこうも力強い発言はできなかった。やはり師匠としては弟子の成長がとても嬉しい。もちろん料理におけるだけだ。

藤ねえが玄関のドアを開けると、涼しい風が入ってくる。夜になればやはりそれなりに涼しくなる。これから本格的な夏が続くが、風通しのいいこの家は幾分過ぎしやすいことだろう。

「それじゃあ藤ねえ、ちゃんと桜を送ってくれよ」

「まだ十時前ですよ。私なら大丈夫ですって」

「ダメよ。桜ちゃん美人さんなんだから、不埒な男が物陰から狙っているかもしれないじゃない」

「び、美人って……」

頬を赤く染めながら、桜はチラチラとこちらを見てくる。……俺に助けを求めているのだろうか。

「そうだぞ。藤ねえの言うとおりだぞ」

桜には悪いが今回は藤ねえの味方だ。最近は落ち着いているが、割と冬木の夜は物騒だ。藤ねえはなんだかんだで剣道の有段者だし、心強い護衛になる。その点では俺よりも適任だと思う。

「せ、先輩それって——」

ぱあつと表情が明るくなる。

「ああ。桜だつて女の子なんだ。夜は気をつけろよ」

「あ、ははは……。そうですよね。……はい。気を付けます」

どこか落胆した様子の桜。その表情の変化の理由はよくわからないが、納得してもらえたようなのでいいか。

「それじゃあ士郎も戸締りしつかりね」

「わかつてるよ」

「先輩、おやすみなさい」

「おやすみ、桜」

屋敷の門から出ていく二人。その背中を見送りながら、久々に三人で食卓を囲めたことに頬を緩めます。

幼い頃、まだ藤ねえが学生だった頃から彼女はこの屋敷によく来ていた。その影響で、俺は藤ねえとは幼い頃から面識があった。藤ねえ、なんて呼ぶのもその影響だろう。今みんなで暮らしている家がありながらも、切嗣はこの衛宮の家を大事にしている。なんでもそれなりの思い入れがあるそうで、未だに外国から帰って来るとよく訪れている。そんなこの場所を俺も好きだった。だからこそ自然とここに訪れるし、時々藤ねえと一緒にご飯を食べている。

桜とは中学生の頃、慎二を通して出会った。なんでも淑女のたしなみ、教養として料理を教えるとのことだった。たまたまお弁当を作ってきた俺に対し、それをつまんだ慎二の突発的な提案がきっかけだった。以来、時々こうしてお料理会として桜とこの屋敷に集まることになっている。当時よりも笑顔が増えたとし、何より料理を好きになってくれた。

俺にとって二人は様々な思い出をくれた人であり、そんな人たちを繋ぎ止めてくれたのが衛宮の家なのである。そして、ここには俺の秘密も隠している大切な場所だ。

二人を見送ると、俺は屋敷の庭に出る。そこはとても広く、いつもこんな広い屋敷を買えたものだと思ってしまう。

月が高々と昇る夜空の下、端の方に建てられた土蔵の前に立つ。鍵を回し、ゆっくりと俺はその思い扉を開いた。

夏だというのに、どこかひんやりとしたその空間に、俺はまるでこの場所だけが屋敷とは別世界なのではないかと感じてしまう。

ゆっくりと息を吐き、中に入っていく。同時にそれまでの衛宮士郎とは切り替える。

「……さて、今晚も始めるか」

俺は上着を脱ぎ、体に巻かれた赤い聖骸布を解く。それは俺が魔術師ということを魔術に関わる人に暴かれないようにするものだ。

土蔵の中心地面に座る。

「同調、開始——」

カツン。まるで銃の引き金を引いたように、その言葉と共に俺の中のスイッチがオンになる。ゆっくりと体の中が熱を持ち始めることを実感する。

衛宮士郎の持つ魔術回路二十七本全てにゆっくりと魔力を流す。一つずつその動作を確かめるように、ゆっくりと——

「最近サボりがちだったけど、大丈夫そうだ」

ふうと息を吐きながら、安堵と共に一人そんな言葉を漏らす。

俺は魔術師であることを隠している。そもそも魔術というものは秘匿するものであるのだから当然なのだが、特別俺の場合は両親の影響で周囲は魔術師である素振りを見せていなかった。

俺が魔術師であることを知っているのは両親とセラとリズ、冬木の管理者である遠坂、そしてこの地に根付いているマキリの長男である慎二だけだ。

最近、他所から魔術師と共に入ってきた異質な存在。それが何かはひよんなことで知ってしまった。それは妹であり、魔術から唯一隔離された家族のイリヤから魔力を感じたことが原因だった。そして今朝、そうなってしまった根源をイリヤの部屋で見つけてしまった。

手遅れ感もあつたのだが、昨晚から着けている聖骸布のおかげで多少正体は誤魔化せているだろう。

なんにしても、異質な存在の正体が掴めるまで魔術の修行も控えるつもりだったので、鈍っていないか心配だった。しかしそれも無いようで安心した。

それならば、ここからは俺が十年間続けた日課だ。

「
ゆっくりと俺は息を吐く。瞼を閉じ、意識を内面に向ける。そして自身の体に張り巡らされる神経を疑似的な魔術回路に変換する。強く、固く、脳から足の指先まで最速の電気信号を流すそれに、魔力を通す。」

「
っ!!」

まるで焼き鰻を体の中に埋め込んでいるようだ。そこだけが体の一部ではないよう

な感覚になり、体中が異物を排除しようと懸命に叫び声をあげる。

しかし魔術というものはこういうものだ。常に苦痛は伴い、異物を体内に取り込み、神秘を成す。魔術師として未熟であり、その存在も中途半端な俺にとつてこれは乗り越えなければならぬことだ。

意識を集中させる。一瞬の油断が死に直結する。俺はそんな危険なことをしているのだから、ちゃんと自覚を持たなければならぬ。

「――ふう」

体の熱が冷めてくる。疑似回路がちゃんと俺の中でその役割を果たしている証拠だ。

十年間、才能なんてこれっぽっちもなかった俺が努力を続け、その果てによくここまで来た。実戦で使うには不十分な出来だが、それでも回路として役割果たすことができるようになった。

魔術師としての能力の優劣は回路の本数とも言われている。だからこそ、俺は優秀な魔術師と同等な本数の回路を用意しようと思った。そのための疑似回路だ。

俺の魔術の師匠である養父、衛宮切嗣には発想こそ悪くないが、それは正しい方向ではないと指摘された。俺のやることは実を結ぶかもわからないことだし、何より常に喉にナイフを当てているようなことだそう。

そんな指摘も気にせず、時間をかけてここまでできた。あと数年かかるかもしれない

が、努力次第では切嗣を見返すこともできるだろう。

そんな興奮やまない状態だが、日課は終わらない。この先は切嗣に言われた、俺自身が進むべき方向性だ。

「投影開始」

出来立ての回路に魔力を込める。特別な演唱など使わず、自己を切り替えるその言葉を口にする。

脳裏に描くのは白と黒の対になる剣。かつて地獄の中で視て、以来確かに俺の中に残り続けているそれ。その設計図を回路に乗せる。

想定するのは基本骨子。この綻びが本物と偽物の差を大きく作り出してしまう。

バチリと回路が音を上げる。未熟な回路と、俺には未だに到達できないその領域のせいで、体中に激痛が走る。痛みのせいで意識を失いかけるが、ここでそうしてしまうことは死を意味する。必死に歯を食いしばり、工程を進める。

ずっしりとした重みが俺の両手にかかる。瞼を開け、それを見ると確かに一対の双剣があった。……しかし、これは失敗だ。

「ダメだ。外見だけで、中身がなっちゃいない」

ふっと体から緊張感が抜け、ため息をつく。

この十年、投影魔術の修行も続けてきたが、満足に成功したことがない。名前を知ら

ないこの双剣の外装を真似ることはできても、内面が伴っていない。基本骨子の想定は甘くないはず。……となると、やはり知識がなさすぎるのか。

以前切嗣に連れられ、博物館に行つたときに視たそれなりに名前のある剣はちゃんと投影できる。無論、その出来栄えは、この双剣と比べてマシということなのだが。

俺は土蔵の隅に双剣を放り投げると、ごろんとその場に寝転んだ。

……まだまだ俺は未熟だ。それは魔術師としてもそうだし、何よりも目指すべきあの背中には遠すぎる。

衛宮切嗣。俺の養父にして、イリヤの実父。魔術師としての才覚は決して恵まれた方ではないのだが、その名は魔術師ならば誰もが耳にしたことのあるものだ。彼の持つ魔術師殺しの異名はそういうものなのだ。あまり外を知らない俺だが、よく慎二からはその話を聞いていた。あまりにも魔術師らしからぬ戦い方とその冷酷さは有名だそうだ。父親としての切嗣をよく知る俺からしたら、別人の話にも思えるのだが。

そんな切嗣の本質は正義の味方だ。それも俺たち家族を守るための。

かつてはすべてを救うことを望んだ彼は現実には叩きつけられ、その夢を諦めた。そして千を守るために百を切り捨てる。そんな自分の心を騙す正義の味方になった。それもやがてあるきつかけがあり、大切な家族を、手の届く範囲の人たちのための正義の味方になったそうだ。

何があつたのかは知らないのだが、俺もそんな正義の味方に助けられた一人である。以来、俺はそんな切嗣に憧れて魔術の修練に励んでいるわけである。

もしも切嗣が留守の時、家族が危ない状況になったら、俺がきっちり守れるくらいに。そんな正義の味方を俺は目指している。……まあ現状セラヤリスの方が強いんだけど。

すっかり夜も更け、零時を迎えようとしているときだった。

俺は衛宮の家の戸締りをしつかりとし、自宅に帰ろうとしているときのことである。

「……イリヤ?」

ぱたぱたと慌ただしく走っていくその姿は、まさしくイリヤだった。

女の子である以前に、小学生であるイリヤ。いくら最近は物騒なことが減っているといても、こんな時間で歩いていいはずがない。

普通なら、今すぐ追いかけて家に連れ帰るのが——

脳裏を過るのはこの街に来た異質な存在、そして慎二の言葉。彼は気づいているかと俺に問いかけた。それに対し、俺はイリヤの持っていたそのことかと思つてしまったがそれだけじゃないのかもしれない。

……本意だがここはイリヤをつけるしかない。何か厄介なことに巻き込まれていないといいんだが。

3. Jumping the magic girls

Interlude 3

「午前零時まで残り一分」

新都に繋がる赤い橋の手前の公園、凜は腕時計を確認しながら呟く。

夏だというの僅かに肌寒さを感じるのは、戦いの前の緊張感のせいだろうか。イリヤはギュツとルビーを握りしめながら息を吐く。

「——油断しないようにね、イリヤ」

イリヤは頷く。凜の表情、声はどれも緊張感に溢れている。そんな彼女を見ていると、イリヤは昨晩の戦いのことを思い出してしまふ。

自分にとつては初めての戦い。今まで生きてきた日常とはかけ離れている。それはあまりにも実感がわかない事であるが、最後の宝具の真名を口にされるその瞬間、死ぬとさえ思った。

……凜の言うとおり、気を抜いてはいけないのだ。そうイリヤは自分に言い聞かせる。

「敵はもちろんだけど、ルヴィアたちがドサクサに紛れて何かをしてくるかもしれないわ」

「……………」

イリヤは言葉を失う。先程まではやっぱり凜さんは大人だな、かつこいい魔術師なんだな、なんて思う瞬間があった。しかし、こうも真面目な表情でとんでもないことを言われてしまうどうしようもない。

対して二人の前に立つのは転入生である美遊と、金髪と同様に派手なドレスを靡かせる西洋人が一人。

「開始と同時に速攻で仕留めなさい。あと可能ならばドサクサに紛れて遠坂凜を葬ってあげなさい」

こちららも真面目な表情で物騒なことを口に出している。おそらく見た目通り育ちがいいのだろうが、こうも危険な言葉を口にするのを聞いていると、彼女の本質というものに疑問を抱いてしまう。

「…………それはちよつと」

さすがの美遊も困った様子である。表情にこそ出さないが、その心境は声色に表れている。

「殺人の指示はご遠慮ください」

美遊の手の中、一本の青いステッキはピシヤリと言い放つ。

パタパタと羽を揺らしながら、現在のパートナーに身を任せるのはルビーの妹であるサファイア。ルビーの妹というのだから、当然これも魔法使いゼルレッチが作った礼装の一つである。使用者の魔力をほぼ永久的に供給することが可能であり、マスターの空想を具現化させるといふ奇跡を起こせる。そしてカードが存在する鏡面界に移動するには不可欠なものであり、今回のカード回収の任には必要なものだ。

時計塔から派遣された魔術師は二人。一人は時計塔の今季主席候補の遠坂凜。彼女は冬木の地が出身ということもあり、今回の任務には適任という判断だった。もちろん危険が伴うものであり、彼女ならばそれも乗り越えられる実力を持っているということだ。そしてもう一人、それが現在美遊と共にいるルヴィア・エーデルフェルトだ。彼女もまた今期の主席候補である。魔術師としての家系も優秀であり、その実力は凜と並ぶものである。だからこそ、今回のカード回収の任は二人の共同戦線としてゼルレッチ、大師父に任されたのだ。

そのために必要なものがカレイドステッキ、ルビーとサファイアだ。彼女たちは大師父より礼装を預かり、冬木の地に訪れたわけである。

それがなぜイリヤと美遊の手にあるのかといえば、それは凜とルヴィアの性格故とい

うことだろう。もちろん、その一つの要因を担っているのは、ルビーの性格もあるのだが。

現状を見ても分かる通り、凜とルヴィアは仲が悪い。それもただ仲が悪いのではなく、とてつもなく、いや、それこそ生まれた瞬間からそれが義務付けられていたレベルで仲が悪い。時計塔では毎日のように喧嘩をし、挙句の果てに講堂を一つダメにしてしまった始末である。今回のカード回収の真意は、時計塔から厄介者払いをしたと言ってもおかしくないのが事実だ。

そんな二人に愛想を尽かせたのがカレイドステツキたちである。それぞれが元のマスターの手を離れ、現在のマスターの場所にいる。結果としてカード回収の効率が悪くなってしまったのだが、それでも毎日喧嘩の度に魔法や宝具を使われるよりはましだろう。

「……仲、相当悪いんだね」

イリヤはぼそりと呟く。あの寒気に似た感覚は実は二人の険悪感から来るものなのではないか、内心ふと思ってしまう。

「ほんとうですよねー。まったく、二人の喧嘩に巻き込まないでもらいたいですよねー」
呑気に言うルビーだが、この中で誰よりも二人の喧嘩の無謀さを知っている。そんな

ルビーがこんなにも達観しているのだから、もはやどうすることもできないのだろう。イリヤはため息をつくと、不意に美遊を見る。

昨日の夜に突然現れた魔法少女。今日になってみれば、転入生として同じクラスになっただけではなく、完璧になんでもこなしてしまう。挙句の果てには家も正面となれば、どうすればいいのかよくわからない。

ただ、彼女は自分よりも戦いに慣れている。半端な気持ちで魔法少女をやっているわけではないのだということだけはイリヤはわかっていた。

「いくわよ——」

凜のカウントが始まる。

先程までとは違った意味で空気が張り詰める。ルヴィアもまた、なんだかんだ言っても凜と同種の間人なのである。この雰囲気から、イリヤはなんとなくその事実を察した。

「限定次元反射炉形成！境界回廊一部反転！！」

イリヤと美遊の声が重なる。莫大な魔力と共に、二人の足元には巨大な魔方陣が浮かび上がった。

「接界!!」

Interlude out

「な、なんだこれ……」

俺は言葉を吐き出す。

夜の遅い時間、家を抜け出していたイリヤを追いかけるように、俺は彼女の後を追った。そんな俺が今いる場所は、今朝方ランニングで訪れた公園だ。その中心、イリヤを待っていたのはあまりにもこの地に似合わない風貌をした女性と、イリヤと同じ年ぐらいの少女、そして遠坂凜だった。

嫌な予感というものは的中するらしい。遠坂が関わっているということは、つまりイリヤが巻き込まれていることは魔術に関すること。もちろん、今朝イリヤの部屋で見つけたあれも、魔術に関わるものだと言うことは一目見てわかった。……それもとびきり異質な。

そして眼前に広がる光景に、俺は釘づけだった。

遠坂の合図と共に魔術を発動させ、イリヤ達は確かに別の世界に跳んだ。それは転移魔術の一種だろうか。わからないが、それと同時に俺の中で広がった違和感。

甘ったるい香りの中にいるような感覚。クラツと眩暈に襲われたが、みんながいなくなつたことで姿を現す。そして、彼女たちの立っていた場所に俺は目を向けていた。

そこで見たものは、空間の歪み。おそらく、魔術に関わる人間でも見つけることはそう簡単なことではないはずだ。こと、結界を見つけることに強い俺は運よくこれに気がつけたが。

その先にあるものは、派手な格好をした小学生二人と、その後ろに立つ魔術師二人。

……なるほど。ここ最近冬木に訪れた魔術師は彼女たちだったのだろう。その二人が持ち込んだのが、イリヤ達が持つ魔術礼装か。

「はは……この光景は親父には見せられないな」

俺は苦笑いを浮かべる。

切嗣とイリヤの母親であるアイリさんは、イリヤが魔術に関わることを望んでいなかった。だからこそ、衛宮の魔術師を継ぐのは長男である俺だと決めていた。それでも二人は複雑な表情を見せていたが。

きつとこの光景は、二人をその時以上に困らせるに違いない。

俺は頭を乱暴に掻くと、体に巻かれている聖骸布を緩める。そして空間の歪みに手を伸ばして回路を開いた。

「解析開始」

それは自己暗示。己を魔術師と化し、その神秘を扱うための暗示に過ぎない。それでも、「トレースオン」この言葉には俺が俺であるには不可欠なものであった。

俺の頭の中に流れてくる様々な情報。鏡面界と呼ばれるその世界の構造、あり方、そのすべて。そして、おそらくそれを構成するにあたる強力な魔力を秘めた力、英霊達。

まさか、イリヤ達が戦っている相手は英霊なのか？

俺は瞼を開け、歪みの先を見る。すると、そこには見たこともないような魔法陣を並べ、今にも最大出力の魔術を放とうとしている魔女が一人。

「まずい——！！」

あれは避けられない。イリヤ達は魔女の魔術によって退路を断たれている。正面切つてあの魔術をどうにかすることなんて、おそらく遠坂でも無理だ。

そうなると、おそらく彼女たちが取る選択肢はこちらの世界に帰ってくるということ。

イリヤに俺が魔術師であることを知られるのはよくない。それから、遠坂には俺とイリヤが兄弟であることも内緒だ。……一応これは切嗣の判断であり、守るべきことだ。

俺は咄嗟に聖骸布を巻き直すと、回路に流れる魔力を抑え込む。一瞬それによる激痛が走つたが、それで足を止めるわけにはいかない。ギリツと歯を鳴らしながら、俺は物陰に身を潜める。

「し、死ぬかと思った!!!」

遠坂の声が響く。まったく、昔から思うのだが、学校と素の差が激し過ぎるだろ。

「な、なにあれ?!」

続くイリヤの声も信じられない、といったもの。遠坂に気心しれた様子で話しかけられるのも、イリヤの性格ゆえなのだろうか。

ああした騒いではいるが、致命傷と呼べる怪我は見当たらない。おそらくあの魔術礼装の力だろう。

「なんにしても大きな怪我がなくてよかった……」

俺は騒いでいるイリヤ達に背を向けながら呟いた。

翌朝の寝起きは決しているものではなかった。疑似回路の鍛錬も含め多少の無茶が祟ったのだろう。体に違和感を覚えながら目を覚ましたのは久々だ。ここ最近ではあまりなかったことだから、酷く苦痛に感じられる。それでも目覚ましが鳴る前、五時半に起きたのは日頃の行いのおかげだろう。

今日に限って寝坊するわけにはいかない。そう思いながら、臉をこする。

二度、三度首の骨を鳴らす。本音を言うと、昨晩は異常がなかったとはいえ、朝一番で回路の状態をチェックしたかった。しかし、同居人であるイリヤとその魔術礼装に気付かれるわけにもいかないので諦めることにした。

俺みたいな才能のない未熟者は努力をするしかない。鍛錬もその一環だし、自己管理だってそうだ。いざつてときに無茶ができる状態にしておかなければ意味がない。特にイリヤたちがあんな状態なんだ。俺だって、もしかしたら――

「おはようございます、シロウ」

六時を過ぎ、朝食の支度をしていると、セラが二階から降りてきた。まだ早朝と言える時間帯なのにシヤンとした恰好をしているあたりさすがと言えるだろう。

「おはよう、セラ。昨日は帰りが遅くなって悪かった」

俺はフライパンをゆすりながら、セラにそう言う。

「いえ。久々に藤村先生たちとの食事だったのでしょ？多少遅くなっても問題ありませんよ」

「……ありがとう」

とても理解のある保護者で助かった。ただ、遅くなった理由が他にあると思うと、も

の凄く罪悪感を抱いてしまう。

俺はフライパンの上にある卵焼きを巻きながら皿に盛り付けていく。今朝のメニューは昨晩多く作った料理をいくつか使いながら、和食メインでいくつもりだ。どうも俺と切嗣以外は洋食の方が好みらしく、セラの料理もそちらに偏りがちだ。

俺としてはやはり和食の魅力も伝えたいわけなので、こうして細々と布教活動を行っているわけである。

お弁当もそちらよりだ。イリヤからの評価はぼちぼちであるが、一成からは大絶賛である。俺の弁当ならなんでも喜んでくれるのだが、その中でも肉が多いとテンションは特に高い。お寺が実家のため、普段はあまり食べないからということもあるのだろう。そういうことを理解していたら、応えたくもなる。

それに今日は森山の分の弁当を作らなきゃいけないか。昨日約束したし。……となると量はもちろん、少しヘルシーな感じの方がいいか。年頃の女の子だとカロリーとか気にしそうだし。

やはり俺は料理が好きなのだろう。こうして誰かのことを考えながら献立を立てて実際に作ることを楽しいと考えられるのだから。

「……………」

ただこの様子は家政婦さんにご不満らしい。昨日の森山との話を振り返れば、その理由も納得できるのだから仕方がないのだけれど。それでも、こうも冷ややかな目で見られると辛い。

「シロウ」

「——ん？」

お玉で味噌汁をかきまぜていると、難しい表情をしたセラが俺の方によつてきた。

……今日は俺が朝食当番で間違つていなかったよな？

「あなたはイリヤさんが夜中、どこに出歩いているのか知っていますか？」

ドキン。心臓が跳ねる。

「昨晚、それから一昨晚とイリヤさんは夜な夜などこかへ行っているようなんですが、シロウは何か知りませんか？」

真面目な表情のセラ。本当は今すぐ本人に問いただしたいのだろうけど、イリヤのことを信頼しているのだろう。本人の口からそれを聞けるまで問いただすつもりはないらしい。本当に保護者の鏡だ。

それでも不安は拭えないせいかな、俺の所に相談にきたわけか。

俺は鍋にかかる火を止めて、俺はセラの方に振り返る。

「ごめん、抜け出しているのは知っているけど、何をしているかはわからないんだ」

そう嘘をついた。

セラに対して嘘をつくことは非常に心苦しかった。しかし俺もイリヤの兄貴だ。セラと同じようにイリヤを信じたい。

「……はあ」

ため息をつくセラ。どつと疲れたような様子の彼女は、目を細めて俺を見る。

「……………そういうことにはしておきましよう」

そう言つてセラは俺に背中を向ける。

「私はイリヤさんの保護者であると同時に、あなたの保護者でもあるわけですから。

……………一応信じています」

少し寂しそうな表情でセラはそれだけを言い放った。

……………完全に嘘だとばれていたな。それでも問いたださなかったということはそういうことなのだろう。本当に胸が苦しい。

それから朝食の支度が終わると、眠そうな表情で降りてきたリズと洗濯物を干し終えたセラと食卓を囲んだ。イリヤは今朝も寝坊で、呆れながらリズが起こしに行つてい

た。さすがに昨日の一件のせいで俺が起こしに行くことは却下されたが。

本来ならイリヤも待つて朝食をみんなで食べたかった。今朝は俺が作ったということもあるし。

しかし俺はどうしても気になることがあり、一人先に朝食を済ませていた。それに二人を合わせてしまったことが申し訳なかったが。

生徒会の仕事の手伝いをしてくると言つて、俺は自転車を走らせて昨晚訪れた公園に来ていた。

すっかり日が昇り、人の姿も見られるようになったこの場所。一般人がいる中で魔術を扱うなんてことはごく法度だ。それでも俺には昨日の一件のことを知る義務がある。イリヤの兄貴として、そしてセラにあんな表情をさせてしまったから……

俺はゆっくりと公園を散歩する。あくまでも一般人であることを装いながら、魔術を使わずにこの公園に広がる違和感を探す。

……しかし昨日のように魔力を使わなければ違和感はわからないらしい。それもそうだ。俺は魔術師であることを隠すために聖骸布を巻いているのだから、本当に一般人と大差ない。いくら結界に敏感であつてもだ。

「……はあ」

失敗したかな。遠坂のことだ。おそらく今晚もあの魔女に勝負を仕掛けるだろう。そうになると、イリヤが再び巻き込まれることは当然のことだ。

できることならイリヤを巻き込みたくない。これは俺だけの願いではなく、家族みんなの総意であるといつてもいい。だからこそ、俺がなんとかできるのであればなんとかしたいと思う。

魔術は使わない。それでも、聖骸布を少しでも緩めることでわかることがあるなら――

「あなた、そこで何をしているの？」

不意に掛けられる声。聖骸布に手を伸ばそうとしていた俺は、自分の正体が暴かれたかのように錯覚してしまう。

振り返り、声の主へと視線を向ける。すると、そこにいるのは昨晚遠坂と一緒にいた西洋人の魔術師。俺に対するその声、視線は明らかに疑いの物だ。彼女も魔術師ならば、俺が魔術師であることを見抜けて当然だ。

「あ、あなたは――」

俺が無言で彼女を見てみると、不意にその強張った表情は崩れる。そして戸惑いが伺える、赤く頬を染めたものを見せる。

まるで普通の少女のような彼女の表情に、俺は自然と頬を緩めてしまう。

「おはよう」

そして何故か、こうして挨拶を自然と口にしていた。

「…………お、おはようございます」

戸惑いながらも俺に習う彼女。やはり昨晚のような魔術師らしい表情ではない。それに安堵してか、俺は更に緊張感を抜いてしまう。

「その制服…………穂村原学園の生徒だよな？」

「え？ええ…………。今日から短い時間ではありますが、お世話になることになりましたわ」なるほど。つまり遠坂と同じ転入生か。やはりこども同じタイミングで訪れるということは、時計塔が関係しているのだろう。彼女も遠坂と同じ時計塔の生徒なのだろうか。

いろいろ問い詰めたいことはあるが、今はまだ俺が魔術師であることは明かすタイミングではないだろう。

俺は浅く笑う。

「そっか。それじゃあ同じクラスになれるといいな」

「…………!!」

俺の言葉と共に顔を真っ赤にする魔術師。…………何か変なことを言っただろうか？森山もよく同じような表情を見せるが、それがなぜなのかはよくわからない。

「え、ええ！同じクラスだといいですわね!!」

魔術師は大きく身振り手振りをしながら、その表情を見られまいと訴える。彼女もまた遠坂と同じで、学園の人の前以外では感情を隠すのが下手なのだろうか。

その様子がなんだかおかしくて、俺は自然と笑みを零していた。

「本日から短い間ではありますが、みなさまと一緒に学業に励むことになりました。遠坂凜です」

「同じく、ロンドンよりこの地に来ました。ルヴィアゼリツタ・エーデルフェルトですわ」

教室が拍手で沸く。男子たちが色めき立つ中、俺はまさか魔術師——ルヴィアゼリツタ・エーデルフェルトと同じクラスになるとは、と驚きを隠せないでいた。

同じように遠坂に関してまだ。彼女もまた、転入してくるとは聞いていたが、同じクラスになるとは思っていなかった。

そのあまりにも偶然とは言い難い現状に、作弄的なものを感じてしまうのは当然のことだろう。

そうして新たなクラスメイトを交えたホームルームは授業開始ギリギリまで引つ張ることとなる。

「……転入生ってやつぱり人気なんだね」

授業の合間にある休み時間ごとに転入生の周りに集まる集団を遠くで見ながら、森山は苦笑いを浮かべる。それが繰り返されること四度目、時刻は既にお昼休みとなつていた。

何をそんなに話すことがあるのか、未だに遠坂たちの机の周りには人が集まつていない。

「そうだな。ただでさえ遠坂は中等部で人気者だったんだ。それが帰ってきたんだから、みんな話したい気持ちがあるんだろうな」

それに合わせて俺も苦笑いを浮かべる。

中等部から上がってきた人でもそうでない人でも、二人の容姿には惹かれるだろう。遠坂は言うまでもなく美人だし、エーデルフェルトは日本人離れした魅力がある。一日中男子が騒がしくなるのもよくわかる。

……俺の場合は二人の性格を知っているからこそ、あまり近づこうとは思えないだけなのだけれども。

「……衛宮君も話したいって思うの?」

「——え?」

いつになく真剣なまなざしでこちらを見てくる森山。その表情の裏に隠される気持

ちまではわからない。ただ、俺に行つてほしくないのだということだけはなんとなく伝わる。

俺は浅く笑う。

「話したいとは思うさ。それでも、今はこっちの方が重要な」

俺は大きめの弁当箱とを三つ出す。

「約束しただろ？ 昼飯を用意してくるつて」

その言葉に表情を輝かせる森山。それも一瞬、今度は頬を赤く染める。

「こんなに多く食べるかな……」

弁当箱を三つ用意してしまったのだが、そのどれもがそこそこの大きさはある。もちろん俺や一成、男子高校生なら普通に食べることができらるだろう。しかし、女子高校生はそんなに食べれないのか。

イリヤに作る量よりも多く、それならばとセラやリス、アイリさんに出すのと同じくらいに量にしたのが失敗だった。よくよく考えれば我が家はよく食べる方なのだ。

「とにかく一成を捕まえよう。それで、食べきれないようなら俺たちが食べるから大丈夫」

「ありがとう」

森山は柔らかに笑う。

そうと決まれば、さつそく一成を捕まえなければ。彼には昨日のうちに昼飯を作つて来るとは伝えてあるから、おそらく生徒会室でお茶の用意をしてくれていると思うのだが――

「衛宮君、ちよつといいかしら」

不意に掛けられる声。それが遠坂の物だと気づくには僅かの間があった。

「少し話したいことがあるんだけど、時間大丈夫かしら？」

ちらりと隣に座る森山に視線を向けながら、俺に尋ねてくる。

「すまん、遠坂。昼は先客がいるんだ。放課後じゃダメか？」

俺の返答にむつと少し不機嫌そうな表情を見せる遠坂。それと同時にクラスがやけに騒がしくなる。遠坂の誘いを断つただの、やっぱり正妻をとるのか、だとか。

「衛宮君、私は真面目な話が――」

きゆるるるるるるるるる。

かわいらしいらしい腹の音が聞こえる。それが遠坂の物だということは、彼女の表情を見れば一瞬で分かった。

「……一緒に昼飯食べるか？」

昼休み、学校のグラウンドからは楽しそうな声が聞こえてくる。昼食を早めにとった生徒たちがサッカーをしたり、野球をしているのだろう。

初夏というには今日もだいぶ暑い。日が高く昇り、もうじき今日の最高気温を記録するのだろう。そんな時間帯によく外に出るものだと感心する。

「衛宮よ、一つ質問をしてもいいか？」

校内でも数少ない冷房が取り付けられた生徒会室、沈黙を破るように一成は声を絞り出した。

彼の手に握られるのは一膳のお箸。そして俺たち四人は大きな弁当箱を並べながら、一つの机を囲んでいる。

「どうした、一成？」

その光景に何か問題があるのあろうか。俺は首をかしげ、声の主を見る。

「……なぜここに遠坂がいる」

わなわなと震え、遠坂を指さす一成。

「いや、一緒に昼食を取ろうと思ってさ」

「だから、何故そうなっているのかと尋ねている！」

バンと机を叩く一成。

そう、俺たち四人というのも一成と森山、それから遠坂のことである。普段生徒会室で食事をとるならば、俺と一成の二人だ。最近では俺のクラスに顔を出すことが頻繁になつてきた一成は森山ともだいぶ打ち解けたのだろう。こうして生徒会室に入ることにも何も抵抗を見せなかつた。

しかし遠坂凛に対してはどうだろうか。……御覧の通りの反応である。

今更ではあるが、中等部の頃から二人の仲は険悪だった。みんなの前では猫をかぶる遠坂と、相手の本質を見定める一成。二人が相容れぬ存在であるのは当然のことだろう。ましてやお互い優等生という肩書でとおっているのだから、それは尚のことだ。

ヒートアップする一成を傍に、冷静な表情を見せる遠坂。彼女はゆつくりと箸をおくとにこりと笑う。

——ああ、嫌な予感がする。

なぜだろう。遠坂と会うのはだいぶ久々なのに、まるで何度も経験したかのような感覚だ。こういった類の笑みを浮かべる遠坂は危険だ。本能がそう告げている。

「あら、柳洞君はお寺の息子さんなのに、空腹で苦しむ人に手を差し伸べることはしてくれないのかしら？」

ピシリ——

ほら、やつぱり。ろくなことにならない。

「……いつ俺がそんなことを言った？」

「直接的には言っていないわ。でも、お昼ご飯を持ってくるのを忘れた私が、ここで衛宮君たちとに対して不満を持っているのでしょ？ それってつまりそういうことじゃないのかしら？」

「俺が言っているのは、貴様がここで一緒に食事をしていることに対する文句だ！」

「あら、それじゃあ御飯だけ与えて屋根はくれないんだ。そんなんでよく説法が説けるわね」

いがみ合う二人。こうなってしまうのは俺にはどうすることもできない。仲介しようにも逆に油を注いでしまうようで、どうしてもな言葉が浮かばなかった。

一成が先とはいえ、遠坂まで喧嘩腰になってしまつては收拾がつかない。少なくとも、俺と森山は巻き込まれないようにするだけだ。

ヒートアップする二人を尻目に、俺は一人で箸を進める。

……ふむ。昨日の残りとはいえ、もう少し食感がいいと料理としていいものになるだろう。確かにその場で食べることを前提とはしているが、弁当に入れることも念頭に入れている量だったのだから、もう少しうまく調理の使用があつたのかもしれない。

誰も文句など言わないが、やはり俺の料理スキルもまだまだ未熟である。

「ちよつと、衛宮君！ あなたはどう思うの!？」

「そうだぞ、衛宮君！元々こやつをお前が拒否しきれなかった甘さが原因だ！はつきり言つてやれ！！」

「ちよつと、柳洞くん、あなたつて人は——」

ああ、確かに一成の言うとおりだ。一成が遠坂のことを苦手であると知っているのもかかわらず、俺が遠坂を誘つてしまったことが原因だ。しかしこうも本人の前でそれについて言つてしまうのもどうかと思う。

……やはりどつちもどつちだと思つてしまう俺は間違えなのだろうか？

「衛宮——」

「衛宮君——」

サアーツと血の気が引く。まるで魔術回路の生成に失敗した時のような感覚。脳裏に死という言葉がちらつく瞬間と同じだ。ああ、遠坂も一成も大した殺気だ……

バンツ——！！

机が叩かれる激しい音。

それと共に先程までとはまた違った緊張感が室内に広がる。それはあれほどまでに熱を持つていたはずの二人すらも冷めるほど。

「柳洞くん、遠坂さん——」

凜と響く声。普段とのギャップのせい、誰のものか一瞬わからなかった。しかし、

俺でも遠坂でも一成でもない、そうなれば誰なのかは明白である。

「……森山？」

わなわなと震える彼女の姿に、俺はいつもの温厚な性格を重ねることができなかつた。

「二人とも、衛宮くんがせっかとお昼を作ってきてくれたのに、なんで喧嘩ばかりするの!? 楽しく一緒にお昼ご飯を食べると思ったのに——!!」

それ以上の言葉をお口にしようとしたとき、森山の顔は突然真っ赤になった。それと同時にまるで風船の空気を抜いたように、きゅーとしぼむように席に着く。

あまりの剣幕に言葉を全員が失う。俺はもちろん、それまでヒートアップをしていた一成と遠坂、そして言った当の本人までもがだ。その様子にさすがに啞然とする。

普段怒らないやつが怒るとめっちゃくちゃ怖い。まさに今のはそういうことだった。

顔を真っ赤にしながらかうつつむく森山。彼女は一時の間を空けながら、ゆつくりと箸を弁当箱に伸ばした。

……そうか。森山がそういうつもりなら、俺も協力をしよう。

俺も森山がそうしたように箸を伸ばす。そしてゆつくりと自分が作った昼飯を口に運びながら浅く笑う。

「昼休みが終わる前に食べきろうな」

Interlude 4

その日の放課後、イリヤ冬木市の郊外に訪れていた。日はまだ高く、士郎が学業に励んでいる時間には既に学校は終わり、こうしてイリヤは開けた森の一部に立っていた。

午前中に授業が終われば、友人と遊びに行くイリヤ。しかし今日だけは違った。よっぽどの友人関係でなければこんな郊外に一緒に来ることはないだろうし、何よりイリヤの恰好が友人との別を表していた。

「……なんでこんな明るい時間から」

ため息交じりの呟き。それにむふんと胸を張るようにルビーは跳ねる。

「もちろん特訓のためじゃないですか！ 昨晩は惨敗したんですよー？ そんな相手と今晩も戦うんですから、何の準備も無しじゃ死にいくようなものじゃないですか！」

「いや、まあわかってるんだけどさ……」

ルビーを横目に肩を落とすイリヤ。小学生ながらも、彼女もルビーの言っていることは理解できている。昨晩美遊と共闘で戦ったキャスターのクラスカード、あれは以前に戦ったライダーとは比べ物にならなかった。もちろんライダーが宝具を使用した場合、

そう簡単に勝利を収められた補償もない。あくまで戦いにおける条件がいいものになつていただけだ。

ぎゅつとステツキを握りしめるイリヤ。

現状は十分に理解しているつもりだ。だからこそ、学校が終わるなりこうして昼間から恥ずかしい恰好をしているのだ。

それに、きつと美遊も——

「それではさつそく飛行からマスターしていきましようか。今回は完全に空中戦になりそうですから」

「う、うん！」

イリヤはルビーの提案に首を縦に振る。

当然脳裏にあるのは昨晚のキャスターとの戦い。神話の時代に魔術を使う魔女は、常に自身の頭上にいた。そんな相手と戦うならば、まずは同じ土俵に立つ必要がある。だからこそ、こうして飛行の練習を行い、そして機動力を手に入れることを目標とした。

飛行自体は魔法少女というものに対するイメージができていたイリヤにとつてはそう苦しいものではなかった。しかし、更に上に行くならば魔力の効率運用も重要となつていく。カレイドステツキからの無制限供給はあれども、飛行にかかる魔力の消費は莫

大なるものである。一度に使える魔力の量は個人の資質によるものであり、そのためにはより少ない魔力で飛びつつ自在に攻撃ができる必要がある。イリヤにとっての課題とはそれに他ならない。

ふわりと空を舞うイリヤ。凜やエーデルフェルトがかつて苦労をしたように、同じ魔法少女の美遊はこうもうまくいかなかった。これも偏に、日本文化に毒された少女が持っている。魔法少女は飛ぶものでしょ」というイメージのおかげだろう。魔法少女の力は空想の力。まさにそれまでイリヤが培ってきたものが生きる瞬間だろう。

「あ、そうだ——」

軽々と空を舞うイリヤは思い出したかのように呟く。

「これ、使ってみてもいい？」

そう言つて取り出したのはアーチャーのクラスカード。その名の通り、弓兵のカードである。凜がロンドンからルビーと共に持ち出した一枚のカードだ。同じようにルヴィアが持ち出したのはランサー、槍兵のカードで、こちらは現在美遊が所持をしている。

美遊がライダー戦で見せたクラスカードの使い方。イリヤの脳裏からはそれが離れず、こうして凜からカードを預かってきた。

「どうぞどうぞ！せっかくなんで使っちゃってください!!」

やけにテンションの高いルビー。イリヤは初めてのことに、高鳴る胸を押さえながらカードをステッキに当てる。

「限定解除!!」

次の瞬間、ステッキは光り輝き一つの漆黒の弓に形を変えた。アーチャーと呼ばれるが故、形となった一つの弓。

「す、すごい！これがあれば勝てちゃうんじゃない?」

あまりにもその力強さから、美遊が使っていたゲイボルクと同じような必殺の武器を想像してしまう。しかし――

「……矢は?」

そう、肝心の飛ばすものがないのだ。

「ありませんよ。以前凜さんが使った時は手近にあった黒鍵飛ばしていましたし」

「そ、それじゃあ意味ないじゃん……」

がくりと肩を落とすイリヤ。

飛行自体がうまくいっていただけか、あとは絶対的な攻撃の手段が手に入れば勝てると踏んでいたが――まあそもいかない。

「まあ地道ではありますが、頑張って特訓しましょう」

カードと分離しながら、元のスツテキに戻ったルビーは相変わらず気楽な調子でそうイリヤに語りかけた。

「そう……だよ。 ミュさんも頑張つて特訓しているんだからね」

自分よりも器用で、それでいて強いもう一人の魔法少女の姿を思い出す。 昨晩は完敗を喫し、飛行に關してもイリヤよりも遅れてしまっている彼女。 おそらく、彼女もまた必死に特訓をしているのだろう。

イリヤはそんな彼女のことを思いながら、己がこれからも頑張ることを胸誓つた。

「ミュさん……私、負けないよ……!!」

ぎゅつと握り拳を作るイリヤ。 短距離走は負けたけど、今度は――

「――つて、え?」

誓いを胸に、これからの特訓に励もうとしたイリヤは一つの異変に気付く。 ……どこから悲鳴が聞こえてくるのだ。 それはだんだんと近づいてくる。 女の子の悲鳴。 確か、イリヤもルビーも聞いたことがあるその声――

「ミ、ミュさん!」

その悲鳴が美遊のものだと気づいたことはほぼ奇跡か。 イリヤの視界に一瞬入った美遊は、はるか高くから地面へと吸い込まれていった。

「……………無理です」

その言葉はあまりにも冷静だった。ただ現実を直視、不可能であると判断したが故に下した結論。齡十歳でそこまでできるのかと問われれば首を縦に振る者はいないだろう。しかし、彼女なら——美遊ならば、と納得するのは他でもないルヴィアだ。

「美遊、あなたが飛べないのはその頭の固さのせいですわ」

ルヴィアは頭を抱える。それを知るからこそその言葉、その苦悩である。彼女もまた、一時ではあるがサファイアと契約を結び、魔法少女をしていた。時計塔の主席候補と謳われるだけのこともあり、凜やイリヤと同様に空を飛ぶことはできていた。無論、そこに至るまでには美遊と同じだけの苦勞があり、彼女の越えられない壁というものも理解していた。

「……………不可能です」

そう、これだ。

美遊は頭がいい。年代と、いや、年上であるルヴィア達と比べてもそれは顕著に出ている。頭がいい——と言えば聞こえがいい。しかし実際には、それ以上に頭が固く、現実的と言えるのだろう。数学ではもつと単純な解法があつてもより複雑なものを使うし、絵を書けばインシュピレーションではなく数学的に描いている。年相応の小学

生であるイリヤと比べればそれは明らかだった。

……だからこそその現状であろう。イリヤは空を飛べて、美遊はそれができない。

ルヴィアは強く拳を握る。時計塔からカード回収の任を任されたのは自分と遠坂凜。その両者が現状自力でそれが全うできず、それぞれが協力者を得ている。それがイリヤスフィールと美遊。それぞれが回収した枚数が直接協力者である凜とルヴィアの手に渡る。つまり、美遊よりもイリヤの方が多く回収したのなら、ルヴィアよりも凜の方が協会より評価されるわけだ。それは凜のライバルであるルヴィアにとってはおもしろくない。

そして何より、今回の敵は空中戦ができないと相手にならないレベルである。そう、空が飛べないまま再び鏡面界に跳べば命の危機にも繋がるわけだ。それはライバルに負ける以上にルヴィアの本意ではない。

「最初からそう決めつけていては何も成せません！」

少しでも希望があるなら——

ルヴィアは必死に美遊に訴える。

「——ッ！ですが!!」

同じように拳を握る美遊。彼女もまた自分が情けなかった。命を救われ、居場所を、

名前を与えてくれたルヴィアにその恩を返したかった。だからこそ、命の危機がろうと戸惑わずに戦ってこれた。結果としてライダーのカードの回収に成功し、凜とイリヤよりも一歩リードすることができた。

しかし昨晩はキャスターに大敗を喫しただけではなく、イリヤにできた飛行ができなかったのだ。

恩人に報いることのできない情けなさから、美遊はぎゅつと唇を一文字に結ぶ。

「おやめください、ルヴィア様」

そこで互いに感情的な二人と対局的に、機械的に言葉を入れるサファイア。彼女は美遊の手の中、かつての主であるルヴィアに冷たく言い放つ。

「パラシュートなしでのスカイダイビングなど単なる自殺行為です」

そう現状と考えを告げるサファイア。

このやり取りはイリヤが特訓をしている冬木市の遥か上空、エーデルフェルト家の家用ヘリコプター内でのものである。ルヴィアが空を飛ぶことのできない美遊に対して行っていた特訓とは、サファイアの言った通りの物。端的に言うなら自殺、その通りである。

無論、ルヴィアもそれを承知の上でのことである。パラシュート以上の安全装置があ

るということを理解して出のことだが。

「こうでもしないと飛べるようにならないでしょう！体が浮く感覚を実体験でもつて知るのですわ!!」

それに対して急激にボルテージを上げるのはルヴィア。それは彼女の考えを否定されてか、それとも純粋な熱意故にか。残念ながら本人すらも理解できていなかった。

「美遊はなまじ頭がいいから物理常識に捕らわれてしまうのですわ。魔法少女の力とは空想の力。つまりそれとは対極的なもの。常識を破らなければ道は拓けません」

「付き合う必要はありません、美遊様。拾っていただいた恩があるとはいえ、このような命令は度が過ぎています」

「……………ッ!!」

ルヴィアの言うことも理解はできる。しかしそれ以上に主の身を案じるサファイア。現状どの意見が正しいかと言われればサファイアのものだろう。それでも必死に応えようとする美遊は献身的である。

「さあ、一步を踏み出しなさい！あなたなら飛べます。できると信じるなら不可能はないはずですわ!!」

「——いえ、どう考えても無理です」

ぼこ。鈍い音がした。

美遊の視界は一変する。鉄の籠に囲まれていたはずが青い空、遠く彼方に見える海、住宅街、木々、木々、木々、木々……………

「……………!!!」

ルヴィアに蹴り落とされた美遊の悲鳴にならない声が響く。

「獅子は千尋の谷に我が子を突き落とすと言いますわ。…………見事這い上がって見せなさい美遊!!」

「ミュさん…………?!?なんで空から…………?」

ぷかぷかと空に浮かぶイリヤは地面で蹲る美遊を見ながら尋ねる。

そんな疑問を抱くのも当然。空から何か降ってきたら驚くし、ましてやそれが人なら特にだ。

上空からルヴィアによって蹴り落とされた美遊。彼女はパラシュート以上の安全装置である礼装サファイアによって、物理保護を受けていたため無傷だった。無論、それ

は外傷であつて心には相当の傷を負つたことはルヴィア以外の誰も容易に理解できていた。

美遊はそんな傷にも負けず、着丈に振る舞いながらゆつくりと顔を上げる。そして声のする方、空を飛ぶイリヤを見た。

「……飛んでる」

ぼつりと呟いた。

美遊は空から落ちるといふ体験はした。しかしそれは、ルヴィアの言う浮くといふ感覚には程遠く、ただの恐怖体験でしかなかつた。その中で得た結論として、やはり人は空を飛ぶことはどうあつても無理であるといふことだつた。

だから美遊にとつて目の前の光景は理解ができないものであり、羨ましいと感じられるものでもあつた。

「美遊様、やはりこのことは……」

サファイアは少し言葉濁して主に提案を促す。

もちろん美遊もそれは理解ができていた。頭を使うタイプである美遊に、精神論を語るルヴィアは教えることは困難であり、そうなると現状最も頼るべきなのは誰かということ。しかし、それは昨日甘い考えを持つていたイリヤに対して戦いに関して私に

任せればいい、そう言い放った美遊には頼みにくいことだった。

それを理解した上でのサファイアの提案ではあったが、美遊は頷いた。

美遊はゆつくりと立ち上がり、心配そうに覗き込んでくるイリヤに少し赤くなつた顔を向ける。

「昨日の今日で言えたことじゃないけど……」

ぎゅつとサファイアを握り、勇気を振り絞る美遊の姿はルヴィアの望んだものではなかったが、彼女なりの成長でもあったのだろう。

I n t e r l u d e o u t

4. Second Owner

クラス委員長の号令が響く。それが今日のホームルームの終了の合図なのだから、各々が喜びの声を上げたり、ぐったりと机につつぶしたりしている。

夏も本番に差し掛かっている今日この頃、日差しのピークは過ぎたものの未だに外は暑い。それでも部活に勤しむ生徒は大きな荷物を抱えて、それぞれが運動場に向かっていく。

こうも他人事のように観察している俺だが、昨年までは同様に授業が終われば弓道場に駆け足で行っていた。美綴や慎二のようなライバルもいれば自然と練習に力が入るし、それに加えて大会前となれば向かう足は少し早くなる。現にインターハイを間近にした陸上部員たちは午後の授業中浮足立っていた。

部活動を辞めてみて初めて分かるのだが、学生の間はやはりこういった何か打ち込むと言うことはとても大切なことだと思う。もちろん俺自身何もやっていない訳ではないのだが、学友と一緒に目標を立てて達成しようと言うことはしていない。なので頑張っている人たちを見ているとどうしても応援したくなるし、なんとなく俺の方もそわそわとしてしまう。

こういう気持ちになると、久々に弓を握ってみたくもなってしまう。……もちろんそんなことはほしくないし、できないのだけれど。慎二たちのように、本当に頑張っている奴の邪魔はしてはいけないからな。

そして何より、万が一の場合——俺自身も今晚に向けて備えなければいけない。

「ええ、せつかくのお誘いだけど断らせていただくわ。ごめんなさい」

教室の端、少し困ったような声が聞こえる。

ああ、そうだった。浮足立っているのは何も運動部だけじゃなかった。今朝方転入してきた元穂村原学園一のアイドルを意識している男子生徒と、意中の相手を奪われまいかと不安を抱いている女子たちも同じだったか。

「どうしてもダメ？ 遠坂さんが引越してから新都の方も少し変わったから、案内してあげたかったんだけど……」

「気持ちだけいいたいとくわ。私もこつちに帰ってきたばかりで、まだ時差ボケで少し辛い……」

「……そっか、それじゃあ仕方ないか」

がっくりと肩を落とす男子生徒。それに対して心底申し訳なさそうな表情を浮かべる遠坂。

さすがは冬木一の猫かぶり。眠いのは確かだろうが、その裏に隠されているのは夜遅

くまで起きていたせい。早く帰りたい理由も寝たいと言うことに加えて、今晚に向けての準備といったところか。

エーデルフェルトに至っては転向初日から午後の授業を体調不良を理由にサボり、おそらく今頃もう一人の魔法少女の修業に付き合っているのだろう。……となると、イリヤも今頃は——

「衛宮君……」

ふと考え事をしてしていると隣から声をかけられた。

「ああ、ごめん。少しぼつとしていた。どうした、森山？」

こちららも困ったような表情を見せる森山。手を後ろに回し、落ち着かない様子を見せている。

「……衛宮君も遠坂さんのことを見ていたの？」

「……ええ？」

ようやく口を開いた森山の質問は少し意外なもの。彼女はゆっくりと俺から目線を逸らす、それでも真剣な表情をしていた。そんなものを見たら、俺も変に濁して答えるわけにもいかない。

「——まあ、そうだな」

「……だよね」

少し落胆したかのような声。

「なんていうか……本当に遠坂は昔から、今も人気者なんだなって思ってた見ていた」
「そうだよ。初頭部の頃からだもんね、この人気は」

苦笑いを浮かべる森山。

十年前、俺は衛宮家の養子になってから穂村原学園に転入した。当時は切嗣と一緒に世界を回ることも多々あり、学園を休むこともあった。それでも、当時から遠坂は人気だったのは知っている。見た目はもちろん、その落ち着き方が同年代とは異なっていた——そう、大人っぽく見えたというのが正しいところなのだろう。もちろん、遠坂凛という少女の本質を知っていた俺からしたら今も昔も変わらず猫かぶりなのだが。

それでも、少なからずこんな俺の心すら惹かせる魅力があるのは間違いない。

「……まあ俺はあいつのことを異性として好きになる余裕なんてなかったよ」

「そうなの？」

「ああ。家で料理をしたり、イリヤと遊んだり、部活をしたり——とにかく目の前のことだけでいっぱいだったんだ」

——魔術の修業だつて命がけだった。だからこそ、魔術師である俺には恋をする余裕なんてなかった。強くなるため、生き残るため、助けてもらった命を無駄にしない

ために日々を必死に生き続けてきた。

親父とアイリさんみたくお互いを愛し合える魔術師なんて世界中どれほどいるのだろうか。根源に至ることを目標としている魔術師にとつて結婚——つまり子孫の繁栄はより優秀な才を持った後世を生み出すためのことである。俺はそれが正しいことだとは思っていないが、魔術師であることを覚悟した時から心のどこかではそれに就いて割り切つてしまつていた。

それに加えて衛宮と遠坂には大きな確執がある。それは親父の代かららしく、遠坂は酷く親父のことを嫌つている。その理由はおそらく十年前にあるのだろうけど、詳しくは話してくれない。親父に聞いても『凜ちゃんと言わないなら、僕の口からは言えないな……』の一点張りである。

魔術師として生きていく覚悟をした俺にはやはり遠坂に恋をすることはできなかつた。もちろん異性として惹かれるだけの魅力はあり、それに魅了されていた時期はある。しかし衛宮士郎にそれは許されない。そう自分で決めていたから、彼女との間には線引きをしていた。

「———そつか。なんか安心したよ」

「………え？」

うん、と頷く森山。首を傾げる俺に対し、彼女は笑顔を浮かべた。

「私もまだチャンスがあるってことだもん……」

ぐっと両手を握り、力強く何度も頷く森山。その表情はまるで初めて切嗣に魔術師としての才能を認められた時の俺と似ていた。何が嬉しいのかはわからないが、それだけ彼女にとつて笑顔になれることだということだったのだろう。

そんな森山を見ていると、不覚にもやはりかわいいと思ってしまう。遠坂がロンドンに行つてから、穂村原の美女と言えば森山菜々美と言われていた。学園でもその人気は揺らぐことなく一番だったということを実感してしまう。

「——つて……ごめんね、衛宮君!!べ、別に衛宮君が遠坂さんに対しての感情が、どうかいうんじゃないかって……!それに対しては私が喜んでた……のかもしれないけど、そうじゃないかもしれないって!!」

「ちよつ……森山?」

真つ赤な顔をふるふると左右に振る森山。普段の落ち着いた彼女からはあまり想像しにくい行動に、クラス中のみんなが驚いた表情で見ている。中には呆れた表情すら見せる人もいるが、その真意はわからない。

「お、落ち着けてさ、森山!」

時々癩癩を起すイリヤを宥めるように俺は優しく森山に声をかける。

するとはっと我に返った森山は教室内を見渡すと、更に顔を赤く染めた。

「(カ) (カ) (カ) (カ) (カ) (カ) (カ) (カ) めんなさい!!」

九十度を通り越し、地面にまで着きそうな勢いで頭を下げる森山。

「だ、大丈夫だって!ほら、うちのイリヤも同じようなことするし……」

小学生と比べてどうする、俺。

「そ、そつか……イリヤちゃんも——ね」

そう言いながら少し落ち着きを取り戻す森山。ごめん、イリヤ……。お前をダシにするつもりはなかったが、結果として森山を少しでも落ち着かせることができた。ありがとう。今度好きな物を作ってあげるから、許してくれ。

「そうそう。だから、変に気にしないでいいから」

「う、うん……そうする………」

あはは、と二人して乾いた笑い声をあげる。無論、お互いにどこかおかしいと感ずけることなのだが。

結果として教室内では解決していないが、俺達の間で解決しているのならそれでいいのだろう。……たぶん。

それからどこか落ち着かない教室で、俺は家の手伝いをするからと早々に帰り支度を始めた。森山は少し不満そうな表情を浮かべながらも、『また明日ね』と声をかけてくれた。しかし今晩は夕食の担当ではないため、実質の所では森山に嘘をついてしまったということになる。……やっぱり胸が痛い。

遠坂はこんな気持ちであの男子生徒の誘いを断っていたのだろうか……

「まったく、衛宮君も大概嘘を着くの下手くそなんだから」

「——うおわああ?!?!」

校門を出てすぐ、急に声をかけられて飛び跳ねてしまう。周りの生徒は皆奇異な目で見ているが、目の前の赤い悪魔はきよとんと惚けた表情で俺を見ていた。

「あら、そんなに驚いたの?」

「当たり前だ!!急に声をかけられたら驚くだろ、普通!」

「そうね。でもそれって、特に何かやましいことを考えていた相手にされたら、特にそうなるわよね」

「……うぐっ」

「あら、やだ。あなた私に対していやらしいことを考えていたの?」

冷たい視線を俺に向けるのは遠坂だけではなく、周囲の生徒。その大半が遠坂のことを知っているのだろう。学園のアイドルに話しかけられているだけではなく、それに対

していやらしいことを考えていたという虚偽の発言に対しての視線だ。

「で、何の用だよ。時差ボケで辛かったんじやなかったのよ?」

「へえ……教室内での会話をちゃんと聞いていたんだ」

「ああ。昨日もそれで断れているしな、俺……」

「……ああ。そうだったわね」

そうだった……って。俺は深々とため息を着く。

なんだって、俺は昔こいつのことをいいと思っていたのだろうか。今も、昔も変わらずこんなにも悪魔じゃないか。

恋は人を盲目にさせると言うが、あの時の気持ちこそそれならば、そういうこと——
—なのだろうか。

「……で、お前の方から声をかけてくるなんて珍しいじゃないか。中等部の卒業式以来だっけ」

「あら、よく覚えているわね。あの時は私が冬木の地を離れるから、あなたたちにはあまり暴れすぎないようにって念を押しておくつもりだったんだけど」

「ああ、そうかよ……俺はともかく、慎二の奴はさすがにかわいそうだったぞ」

「そうかしら。間桐君には特に強くお願いしたつもりなんだけど」

ああ、そうだ。こいつはこいつという奴だ。その困ったような表情の裏にはさぞ黒い物が

あるに違いない。あの時もさながら恋する乙女が卒業式を機に告白をするシチュエーションだった。イリヤが持っていた少女向けの漫画をたまたま読んでいたせいかな、普段期待などしないところに變に心をときめかしてしまった俺がバカだった。……本当に思ひ出したくない。慎二に至ってはあれから一年は女性恐怖症が抜けていなかった。

「……用がないなら先に行くぞ」

「ちよつと——！」

歩き出す俺の肩を強く握る遠坂。俺はそのあまりにも急すぎる態度にむつと表情をしかめながら、彼女の方に振り返る。

「一年半ぶりに会うんだし、一緒に帰らない？」

……俺はどうしてここにいるのだろう。普段イリヤ達と暮らす普通の住宅は本当に普通だ。普通の二階建ての木造住宅で、浮世離れたメイドさん二名と世間知らずのお嬢様であるアイリヤさん、そして母親譲りの美しい銀髪を持つイリヤを除けば、普通の日本の一軒家だ。それに比べれば衛宮の家は伝統的な日本の家屋で土地も広い。こちらはまあ普通ではないとも言える。

しかし俺が今いる場所は更に浮世離れした場所だった。畳などなく、百円シヨップで買えるようなオブジェなど当然あるわけもない。昔ヨーロッパで見た高価な壺やら何やらが置いてあり、天井からはきらきらと輝くシャンデリアが吊るされている。

慎二の家も大概豪邸ではあったが、あいつの家は昼間なのにも関わらず暗くて、どこか嫌な空気が漂っている。もちろん魔術師の家なんてそんなものだから仕方がない。しかしここはそこに比べて明るく、ただ普通に豪邸という感じだった。

「お待ちせ。紅茶で大丈夫だった？」

「……あ、ああ。ありがとう」

部屋の中を観察していると、遠坂がトレーにティーカップと銀色のティーポットを乗せて部屋に入ってきた。長いテーブルにカップを二つ置く。そして独特な洗みのある香りを立てながら、遠坂はカップに少し紅茶を注いでいく。

深めに腰掛けていた俺は、僅かに前に姿勢をずらすとゆっくりとカップを持つ。ゆっくりとカップを揺らしながら、その香りを嗅ぐ。

「別に毒なんて入ってないわよ」

くすくすと笑う遠坂。俺としては普段セラがやっているのを真似していたつもりなのだが、それを笑われて急に顔が熱くなった。

「いただきます」

それだけ言って少し焦ったようにカップのふちに口を着ける。

「——へえ」

美味しい。一口口に入れただけで、その香りと味の柔らかさに驚いた。

もちろん茶葉がいいのもあるのだろう。しかし、それ以上に遠坂本人の腕のおかげだろう。遠坂家は完璧主義であるという認識だった。それは親父から聞いた話でもあったし、それ以上になんでもできてしまう遠坂を見ていたらそうなんだと思えた。それでも、我が家のスーパーメイドさんであるセラと同等の紅茶を淹れてしまうとは……

「どうかしら?」

「いや、正直驚いた。すごく美味しいぞ」

「そう。よかったわ」

遠坂は浅く笑いながら、俺と同じようにティーカップに口を着けた。

……さて、紅茶でリラックスもしたことだし少し整理しよう。

今晚に備え、衛宮の家に一度向かおうとした俺は遠坂につかまった。そして一緒に帰ろうと言われた時には珍しいと思う反面、俺の中の危険を知らせるシグナルは鳴っていた。無論、それは遠坂本人に対してもそうだし、周りの目に対しても、そして嘘を着いてしまった森山に対し。

挙句遠坂の口車に乗せられ、家まで送る羽目になった俺は、結局家に招きこまれてし

まった。やれ女の子を一人で帰すなどとか、森山さんに嘘をついたくせにだとか……。女には優しく、という切嗣の教えはあるが、それを抜きにしても俺と遠坂の相性は最悪らしい。一緒にいたらきつと一生尻に敷かれるに違いない。

かくして連れてこられた俺だが、未だに戸惑っている。本来魔術師とは家宝とも言えるその秘術を秘匿している。それが隠されている魔術師の工房には通常部外者は招かない。侵入は容易であっても脱出は不可能というものが鉄則である。無論、秘術を盗まれるかもしれないという危険を冒す必要はない。ましてや遠坂は衛宮を嫌っている。従って俺を紅茶を出して歓迎するなんてことはありえない。

そうなると考えられることは一つだけ。……それを理解していついてくるなんて、俺というやつはつくづく未熟者だ。

ティーカップから口を離す。深い紅みを持った水面はゆらゆらと波紋を浮かべている。そこにはあか抜けない表情をした未熟者が映っており、その優しい香りとは正反対に不穏な心を映しているようだった。

「——ねえ、衛宮君」

……来た。

「ん？」

俺は遠坂の顔は見ない。こんなにも情けない表情をしたやつが魔術師としては数段上であり、口先に関しては天と地の差どころではない相手と対峙できるものか。

「衛宮君ってイリヤスフィールって知っている?」

「——ッ!」

紅茶に映る表情が強張る。

未熟者め。なんのために遠坂の目を見ずにいたのか。自分の考えていることを読まないためにそうしていたはずなのに、こうも単純に応えてしまっただけだ。

「……俺に答える理由があるか?」

「いやね、そんなに構えないでよ。私としてはお茶請け程度の会話のつもりだったんだから」

「……なら、遠坂の手作りクッキーでも出した方がいいんじゃないか」

「そうね。今度はそうしてみようかしら」

「……………」

ティーカップを置きながらくすくすと猫を被った様子で笑う遠坂。それとは対極的に俺には余裕などなかった。切嗣との約束を反故にする恐れがあったということと、遠坂に隠していることすべてを暴かれるかもしれないという不安があったからだ。

ある晩から突然イリヤが魔力の残留痕を感じるようになった。その時から抱いた違

和感は魔術礼装、そして昨日の夜に遠坂と一緒にいて、別次元で英霊と戦っているところを目撃してから確信に変わった。イリヤは魔術に関わっていると。それもセラやリズが知らないことから、切嗣とアイリさんは関わっていないのだろう。つまり、倫敦から帰ってきた魔術師により、不測の事態として巻き込まれてしまったということだ。

目の前の魔術師は驚いているのだろう。偶然にも巻き込んだ少女が一般人とは思えない魔術回路を持っていたら。その大半と魔力はアイリさんによつて封印されているのだから、その本質は未だに見えていないのだろうけど。そしてそれに加え、未だ口にしていないがイリヤが冠する姓を知っているからこそ警戒をしているのだろう。

「あら、もう帰るの?」

俺が遠坂と同じようにティーカップを置くと遠坂は首を傾げた。

「ああ。遠坂は俺に嘘吐きとか言っただけだし、帰ってやらなきゃいけないことはあるんだ」

「……そう」

遠坂は考えた様子を見せる。しかしそれだけで、別段俺を引きとめたりはしない。

俺はバックを掴むと、立ち上がりゆっくりと遠坂の横を抜けていく。

「……またな、遠坂」

「……ええ。またね、衛宮君」

交わした言葉それだけ。

俺には遠坂の考えていることは何もわからない。しかし遠坂はどうだろうか。あれだけのやりとりである程度理解をってしまったのだから、これ以上何も言つてこないの
だろう。

……完敗だな。

「——ああ、そうだ」

俺は忘れ物を一つ思い出す。ぴたつと止まり、あれ程みることでできなかった遠坂の
顔を見る。

「紅茶、本当に美味しかったよ。ご馳走様」

Interlude 5

理解ができなかった。

昔からそうだ。頭の回転が速く、誰よりも努力家で、プライドが高く、常に魔術師として合理的に生きてきた遠坂凜にとって、衛宮士郎という男の在り方は理解できなかった

た。

警戒はしているつもりであっても平気で御三家と呼ばれる遠坂の工房を訪れたり、もつと質の悪い間桐のそこにも行ってしまう。仮に戦闘となればよつほどの実力者でなければ、敵のホームグラウンドで勝ち目などない。真つ当な神経をしていれば、そんな危険を冒すはずがない。ましてや遠坂凜が自身の父親を嫌っていることを理解しているはずなのだ。

今日もそうだ。いくら毒が入っていないと言われても、それを鵜呑みにして出されたものをきつちり残さずに飲み干すなど考えられない。本来なら自白剤なり、睡眠薬、更にならば魔術回路に不具合を与える薬だつて簡単に混ぜることだつて可能だつた。それをしなかつたのにはそれなりの理由があるのだが、それでも凜のことを信じ切つた士郎に対して納得ができなかつた。

それだけじゃない。学校では普通に友人として接してきた。昼食も誘つてきて、弁当を分けてくれた。馬の合わない一成との間も仲介してくれた。それにも関わらず、何の見返りも求めない。等価交換が基本である魔術師としてありえないことだ。遡れば倫敦に渡る前から凜にとって士郎は同じ魔術師として理解できない行動ばかりをしてきた。

様々なことがあつたが、極めつけは中等部の頃のことである。忘れることなどできな

い。あの真つ赤な夕日が焼くグラウンドでの出来事を。

彼は跳んでいた。跳べるはずもない高さの高飛びを、ひとすらに、何度も、一心に、跳べるはずがないのに。ただまっすぐにそれを見据えて、誰もが無理だと言つても、諦めずに跳んだ。そんなことをしても無駄だと言ひ放たれても、跳んだ。無様にぼろぼろになつても跳び続けた。グラウンドから遠く離れた校舎からその様子を見ていた凜にも聞こえるくらい騒がしかったグラウンドは、静かになつても士郎は続けていた。

凜にとつてはそれまでに面識もあり、どういつた人間かも知つていた相手であつたはずなのに、その光景は酷く胸に突き刺さつた。そしてそこで痛感したのだ。衛宮士郎という人間は自分とは正反対の人間であるということ。

最終的にやはり跳ぶことはできなかつたが、凜は思つてしまつたのだ。理解はできなくても、その在り方は今までの自分を全て否定するものであつても、ただひたすらに挑戦を続ける背中を綺麗だと思つてしまつた。

それは今まで衛宮士郎という人間に対して苦手意識を持っていた理由の回答でもあつたのだろう。ただ、それからは違う意味で意識をし始めてしまつていた。しかしそれは遠坂凜という在り方を変えてしまうものであつた。だから、彼女は無意識のうちに倫敦への留学を足早に進めてしまつたのだろう。

それから一年半、遠坂凜がそうであつたように、変わらずに衛宮士郎はいた。それを

実感したのは最後の一言だ。

『紅茶、本当に美味しかったよ。ご馳走様』

「何よ、あれ！そのまま邪魔しましたで帰ればよかったじゃない!!」

があ!!と叫ぶ凜。

何気ない一言であつたのは間違いないし、もてなしに対して正當な対応なのは理解できる。しかし、結果としてはそうではなかつたのだが、毒が入つていてもおかしくなかつたそれに対して、まさかお礼を言われるとは思つていなかった。

凜の質問に対し、魔術師らしく対応をした士郎に対して少なからず感心をしていた凜にとつてその一言はなかつた。ましてや、その言葉を口にしたときの表情は笑顔だつたのだ。少しふてくされたような表情だつたが、笑顔だつたのだ。

凜にはそれが酷く納得できなかった。それまではイリヤスフィールと士郎の関係がある程度予想がついたことで満足をしていた。それも士郎の一言で台無し。

どんな時でも余裕を持つて優雅たれが家訓である遠坂家であるが、それも今は見る影もない。唸り続けるその姿は普段学園で見ることなど絶対に叶わないだろう。そして遠坂ファンからすれば、幻滅で済めばいいだろうと思わせる光景だ。

未だ怒りが収まらぬまま、凜は乱暴にティーカップを掴む。そしてすつかり冷めてしまった中身を一気に飲み干す。

「……ぷはあつ！」

風呂上がりの牛乳ではないのだから、そうツツコミをされるような勢いのまま、ティーカップを置く。

「何よ、あいつ！ 本当にもむかつく!!」

わなわなと手を震わせながら叫ぶ凧。物に当たりたい気持ちもあるのだが、そう壊してばかりもいられない。買い換えればいい、魔術で直せばいい、そう安直な考えは財布を枯渇される。こと、宝石魔術のスペシャリストである遠坂凧はそれをよく理解していた。

いかいrをぶつける先がみつからないまま、乱暴にソファーに顔を埋める。

むかつく、むかつく、むかつく、むかつく、むかつく——!!

バタバタと足をバタつかせる。それも疲れ、次第に力尽きたように全体重をソファーに預ける。

「……ばか」

その言葉は誰に向けてか。 土郎に対しての物か、それとも——

「——落ち着いたかしら？ 凧」

「——ッ!!」

跳ね上がる凜の体。その表情はハトが豆鉄砲を食らったなんてものじゃない。それこそ大砲でも持つてきた方がまだ正しいのかも知れない。

一年半、人が新しい生活に慣れるのには半年もかからないという。一年も経てば習慣さえすつかり変わってしまうのだろう。

倫敦に渡つたとき、最初に凜が会つたのはルヴィアゼリツタ・エーデルフェルトだ。当初、新しい環境に緊張をしながらも、時計塔でのコネを得るためにも人間関係の構築は必須だった。だからこそ、ルヴィアと仲良くなることも必要だった。しかし、出会つて一日もしないうちに今のような関係ができてしまった。それはもう、気が合わなかつたとかそういう問題じゃない。思い返せば第一印象こそは悪くなかつた。悪くなかつたのだが——水と油が混ざらないように、天と地が合わさらないように、そう神が決めたものであるのだから仕方がない。

そんなルヴィアと揉めることは日常茶飯事で、冬木に派遣された理由が主席候補だとか、出身地だとか言われてはいるものの、それが要因のところもある。生憎苛立ちをぶつける相手もない土地で、凜は一人暮らしをしている部屋に戻ると今と同じように枕に顔を埋めていた。怒つたとき、落ち込んだとき、悔しいとき、押し殺しきれない様々な感情をこうしてぶつけていた。

今もこうして同じようにしていたのだが、それが許されるのは一人暮らしである時。ここは日本国冬木市遠坂邸。幼少期から凧が過ごし、共に暮らしてきた家族のいる家だ。

「お、お母様!?!そ、その!!お見苦しいところを見せました!!」

かあと顔を真っ赤にしながら、土下座をする勢いで頭を下げる凧。

少し皺が目立つが、美しい黒髪を揺らしながら柔らかい笑みを浮かべる凧の母親、遠坂葵。

「いいのよ。凧も年頃なんだし、魔術師とかそういうことを抜きにして恋をする年ですもんね」

「えっ!?!衛宮士郎は別にそういう人間じゃ——!!」

「ええ、知ってるわ」

「——!!」

更に顔を赤くする凧。コロコロと笑う自分の母親に言い難い感情を抱きながらも、この雰囲気には勝てないものと再認識をする。

「ふふ……。もし凧に彼氏なんてできたら、時臣さん年甲斐もなくキレちゃいそうね」

「そうでしようか……?」

「ええ。そうですよね、時臣さん?」

葵は戸惑う凜を横目にかつん、かつんと杖を突く音のする廊下に振り返りながら笑った。

Interlude out

「それでね、ミュさんがね——」

夕食の場、俺の隣で心底楽しそうに友達のことを語るイリヤ。それに耳を傾けながら、俺は笑みを浮かべながら相槌を打つ。

俺は昨日は衛宮邸で藤ねえ達と夕食を食べ、今朝もいち早く朝食を済ませてしまっていた。ここ最近、特に昨日は転校生も来たということで俺に話したいことがたくさんあったのだろう。セラに軽く注意をされながらも止まらずに話し続けるイリヤ。

俺としては昨日藤ねえから転校生とはうまくいっていないと聞いていたから、楽しんで語るイリヤを見て心底安心をしている。俺の方でもいろいろあったから、イリヤの笑顔を見ていると癒される。……よく勘違いされるが、ロリコンとかそういう意味ではなく、だ。

とにかくイリヤの話を総じると、転校生の名前は美遊・エーデルフェルト。うちのク

ラスに転校してきたルヴィアさんと同じ姓を持っている。ただ、美遊という名前からして日本人であるだろうから、ルヴィアさんと直接的な血の繋がりは無いのだろう。それでも、突然建った目の前の豪邸に住む二人は昨夜の一件に関係しているのだろう。さしずめ遠坂とイリヤと同じような関係に違いない。

「まあさすがにいきなりアニメ見せられたら驚くわな」

むしやむしやと夕飯を食べながら、俺の代わりにイリヤに答えるリズ。

「そ、そうかもしれないけど……」

ちらりと困った表情で俺の方を見てくるイリヤ。これは助けを求めてる目だな。俺は浅く笑うと、

「まあ趣味は人それぞれだからな」と安直な答えを述べた。

「そう、それ！趣味は人それぞれ!!だから、仕方ない!!」

そう、仕方がない——とぶつぶつ呟くイリヤ。何が仕方がないんだと思うのはイリヤを除く一家全員。ごめん、イリヤ。俺がもつとうまくフォローをするべきだった。

「お友達と仲がいいことはいいです。けど、最近遊び過ぎじゃありませんか、イリヤさん」

「——うっ!?!」

セラの言葉にぐさりと釘を刺されたかのように動きが鈍るイリヤ。

「ほ、ほら！子供は遊ぶのが仕事って言うじゃない！」

「ええ。ですが、勉強は学生の本分です。学校での勉強はもちろんですが、宿題もしつかりやつてくくださいね」

「しゅ、宿題は夕飯食べて——お風呂に入ってから——」

くるくると箸の先を回しながら、視線を宙に泳がせるイリヤ。そして最終帰着が再び俺。俺は笑顔を浮かべる。

「宿題は今晚中に終わらせちゃえよ」

「ええ!!お兄ちゃんもセラの味方!?!」

「当然です。今日も遅くまで遊んでいたんですから」

ふんと腕を組むセラ。その隣でリズは鬼畜鬼畜と絶えず訴えている。俺じゃなくリズに助け船を求めれば、或いは助かったかもしれない。しかし、セラとリズが殴り合いをしているように治まりは効かなかったかもしれないが。

それでも、夜な夜な外出していることを知りながらもそれを出さなかつたセラは優しいと思う。それを想ってこそその判断なのだが、知らぬイリヤから不満も出る。

俺は落胆するイリヤの耳元に口を運ぶ。

「すまん、イリヤ。けど、宿題でわからないところがあつたらいつでも教えてあげるから

許してくれ」

「お、お兄ちゃん……！」

瞬間、ぱあと晴れるイリヤの表情。まさに曇天が割れ、日の光を仰ぐようなその変貌についつい笑みを浮かべてしまう。

コンコン。

勉強机に向かってしていると、部屋にノックの音が転がってくる。

「……お兄ちゃん、入ってもいい？」

今度は消え入りそうな声が聞こえてくる。俺の方から提案したのにも関わらずなで申し訳なさそうにするのだろうか。

「どうぞ」

俺は苦笑いを浮かながら答える。

「お、お邪魔しまーす……！」

おつかかなびつくりといった様子 of イリヤ。お風呂上りらしく、かわいらしいピンクのフリルが着いたパジャマを着てほのかに頬を赤く染めながら顔を覗かせる。

「宿題、わからなかったのか？」

「う、うん……ちよつと算数が」

「どれ、見せてみて——」

それから数十分、イリヤがわからないという算数の問題を一緒に解いてあげた。俺も別段勉強が得意というわけではないが、さすがに小学生レベルの物はわかる。それに、セラほどではないが時々イリヤにこうして勉強を教えることがあったから、教えるということに関して慣れていないわけではない。

最初は理解ができないとしかめつ面をしているイリヤだったが、次第に楽しそうな表情になっていくのだから、教えが得もある。

「やっぱりお兄ちゃんが一番勉強教えるの上手だね！」

るんるんと楽しそうなイリヤ。パタパタと俺の部屋にある椅子で足を振りながら笑顔を浮かべる。

「ありがとう。でも、セラの方が上手だろう？」

対して俺はというと、ベットの端に座りながら苦笑いを浮かべる。悔しいが、現状俺は家事全般を含めて勉強もセラに勝てない。せめて料理だけでも、と思つても和食以外は完敗である。さすがはアインツベルンが誇るスーパーメイドさんだ。

「うーん、セラは確かに凄いんだけど、わかりやすいかと言えばそうじゃないかも……」

「あ……そういうえば、俺も昔同じように思っていたっけ」

確かにイリヤの言うとおりセラは頭がいい。しかし、小学生であるうちはより深い理論よりも単純な考え方が大切だ。本質を理解する以上に、概形を理解することが重要。足し算や引き算を物に例えて教えるのもそれと同じことだ。

「藤村先生はわかりやすいんだけど、授業が授業じゃないというか——」

「ああ、それもわかる。なんか、別のベクトルに走っちゃうんだよな、藤ねえ」

お互いに顔を見合わせて苦笑いを浮かべる。

時刻は十一時少し前。昨晩のことを考えると、もうじき遠坂との集合に合わせて準備を始める頃だろう。実際、さっきからイリヤは忙しなく時計を確認している。

「えっと、それじゃあ——」

「なあ、イリヤ」

おそらくもう寝るね、と提案をしようとしたであろうイリヤの言葉を遮る。

遠坂に巻き込まれたであろうイリヤ。今はまだ感じてはいないかもしれないが、イリヤのしていることは命に関わることだ。そもそもが、魔術というものはそういうものだ。常に死を隣り合わせている。この十年、切嗣に拾われてから俺は学んできた。

そんな血生臭い世界にイリヤを巻き込みたくない。それが俺たち一家の願いであり、だからこそイリヤだけに内緒にしてきた。

十年間貫いてきたことを、それをたつた数日で打ち壊されたのだから気持ちのいいものでもない。

だから、問わねばならない。

「——今は楽しいか？」

その質問に戸惑いの色を見せるイリヤ。核心を突かれた犯人のように、瞳孔が開き、瞬きの回数が増え、視線が泳ぐ。手持無沙汰な手はもそもそと動く。相手との駆け引きをするときに、と切嗣から仕込まれたものだが、まさかイリヤに使うことになるとは。

たつた一言であるが、含みが多くある質問。ましてや、先程までとは打って変わって真面目な顔である。少なからず引つかかるところのあるイリヤからしたら、戸惑うのも当然だ。

だが、それを見せたの僅かな間。すぐに笑顔を見せると、

「うん！」

そう答えた。

「お、お兄ちゃん!？」

その回答と共に頭を垂らす。表情が見えないせい、イリヤは心配そうに俺の方に駆

け寄ってきた。

……俺も駄目だな。予想していたことなのに、こども落胆をしてしまうとは。

「イリヤ——」

「わっ!?!」

俺の真正面、突然顔を上げられて心底驚いた声を上げるイリヤ。少しよろけそうになった彼女の肩を支えると、俺は顔を覗き込む。アイリさん譲りの綺麗な赤い瞳を見ながら告げる。

「何かあったらすぐ俺の名前を呼ぶんだぞ。怖いこと、辛いこと、悔しいこと、泣きたいこと。俺はさ——」

玄関のドアがそつと閉められる。

「……行つたか」

こどもも気を張っていれば気づくものか。未熟者ではあるが、それ以上に素人であるイリヤが気配を消しきるなんて無理な話だろう。

ベッドに両手をつきながら、天井を仰ぐ。

イリヤは本当にわかつていない。今はいいかもしれないが、確実にこれから後悔をす

る瞬間がくることを。それが誰かの死を目の前にしたとき、或いは自分が死ぬかもしれないその瞬間に思ってしまったては遅いのだ。……まあ決まってそういう瞬間なのだろうけど。

それでも、普通の小学生として生きてきたイリヤなら尚更そのギャップに大きなショックを受けるだろう。……魔術師ではない、その覚悟もない、イリヤだから。

「ごめん、切嗣……」

俺は今ここにいない命の恩人であり、守ると決めた人の父親に頭を下げる。

5—1. 再戦と選択

Interlude 6

「……………今は楽しいか？」

士郎がイリヤに投げかけた質問。はたからその光景を見れば、兄が妹と交わす普通の会話だ。最近の学校のこと、友達とのこと、他にも兄が妹に投げかける話題としては十分妥当であるのだろう。

しかし、それを投げかける士郎の表情と受け取る側であるイリヤの動揺は普通ではなかった。

イリヤが抱える隠し事を知る士郎がそれを遠回しに問い詰める。無論、イリヤとしてはそれがばれているとは思っていないのだから、士郎の質問の真意は理解してはいないのだろう。それでも、心に引つ掛かるところがあるからこそ、動揺という反応を見せているのだろう。

「うんー」

それでもイリヤは笑顔でそう答えた。その笑顔の裏には何を考えてか。毎日の学校生活、友達との日常、転校生でなかなか打ち解けることのできなかつた美遊に頼られたこと。そして魔法少女というずっと画面の中にしか存在しないものになれたことに不安以上に楽しさを感じていたから。

だからイリヤはそう答えた。だからこそ士郎がこんなにも泣きそうな表情をしている理由がわからなかつた。

魔法少女がどういうものかは士郎には理解できない。それでも、魔術というものがどういったものかはわかる。かつてそのせいで家族を、友人を、大切な物すべてを失つたことがあるからこそ、その恐ろしさは知っている。それに加え、衛宮切嗣と世界を渡つた経験、日々の修行全てが魔術の危なさを知るには十分なものだった。

士郎はそれを理解することなく、魔術を受け入れてしまっている妹に言い難い感情を抱いてしまったのだ。

だから、せめてと——

「何かあつたらすぐに俺の名前を呼ぶんだぞ。怖いこと、辛いこと、悔しいこと、泣きたいこと。俺はさ——」

「——イリヤ！」

「ふえっ!？」

突然の罵声にイリヤは体を震わせる。

「あんた、これから命をかけた戦いに行くのよ。そんな気の抜けた表情をしないで」

「……あ、うん。ごめんなさい………」

何が何だかわからないまま謝るイリヤ。それでも冷ややかな目を向ける美遊と腕を組んでいるルヴィア、真剣な表情で自分を見ている凜を見て、なんとなく理解をする。

ここは新都に繋がる橋の手前の公園。時刻はもうじき零時を刻もうとしている。相変わらず能気なルビーを除けば、これから戦いに赴くということがわかる。

「もう、凜さんつてば頭が固すぎですよねー」

ぱたぱたとイリヤの周りを飛び回るルビー。イリヤはそれに対して首を振る。

「そんなことないよ。私達、これから昨日負けた敵と戦いに行くんだよ。……うん。凜さんの言うとおりで」

「……イリヤさん」

珍しく元気のない声を出すルビー。

間違いなくこの中で唯一イリヤの心情を一番理解できているのがルビーだ。イリヤは気づいてはいないのだが、実はこっそりと土郎の部屋に潜り込んでいた。だからこそ

ここに来る前にした士郎とのやり取りも知っている。兄であり魔術に精通する士郎が、どのような気持ちで質問したのかも理解はしていた。だからこそ、本来はちゃんと言葉をかけるべきなのだと思っていたがそれができないでいた。いつも通りのテンションはその裏返しというやつだろう。

「ルビー」

「どうしました？イリヤさん」

「……転身、お願い」

その言葉は覚悟から来るものか。或いは全てを振り切るためだけに奮い立たせようとしているのか。それは理解できなかったが、ルビーは今のマスターの指示に従うだけ。

世界は歪む。上下が反転し、自分が今まで立っていた場所が空に変わる。独特な感覚にイリヤは言い難い難い感情を抱く。

兄の言葉が頭を離れない。

それは楽観的になれば、淡い恋心を抱く少女としては胸をときめかせるもの。直視しなければいけないこれからのことを考えるならば、それはそんなに甘いものではない。まるで鏡合わせのような感情ではあるが、その間は歪んだ世界そのもの。

昨晚の魔女との戦いを思い出せば尚のこと。

今までは美遊の持つ魔法少女として才能とカードの力、そして凜とルヴィアのバックアップがあつての勝利だ。何もイリヤ自身が特別な貢献をしたわけではない。しかし今回ばかりはそうはいかない。二人の魔法少女が力を合わせてこそ、神代の魔女を打倒することができる。

——もう一度、イリヤはゆつくりと深呼吸をした。

世界の歪みは修正されていく。

「接界完了!!」

「二度目の負けは許されませんわよ!!」

凜に続きルヴィアの声が響く。それと同時に二人の魔法少女はいくつもの魔法陣が広がる空の下、駆け出す。

魔法陣の数は昨晚と同じ——いや、それ以上だった。昨日は接界と同時に魔法陣から放たれた無数の攻撃に耐えきれず撤退をした。しかし今日は前情報がなかった昨日とは違う。

しかしイリヤにはただ一つの心配ごとがあつた。

神代の魔女であるキャスターと戦う前提条件として空を飛ぶということが必須で

あった。それを昼間の段階ではできなかった美遊。イリヤはゆっくりと心配そうな表情を美遊に向ける。

「いけますか、美遊様？」

「大丈夫」

美遊とサファイアのやり取り。次の瞬間、美遊は地面を蹴った。地面は跳ね、土が舞う。そして美遊は宙を蹴った。

「と、飛んだ……」

「飛んだというよりも跳んだって感じですよー」

驚くイリヤを傍目にルビーは若干呆れた様子で相槌を打つ。魔法少女の力は空想の力。よくイリヤが観るアニメと同等にするのはどうかとは思うが、少なくともルビーの抱く魔法少女というものと美遊の選択はあまりにもかけ離れていた。

それでも、キャスターとの戦いに必要とされる最低限のラインをクリアした美遊を認めざるおえなかった。

「さあて、私たちも行きますか！」

「う、うん!!」

ルビーの掛け声に合わせてイリヤは地面を蹴る。美遊程の勢いはないが、確かな加速力を持ってイリヤは空を飛んでいく。そして高度はキャスターと等しくなった。

昨晩は覆すことができなかつた地の利。それを二人の魔法少女は魔女と同等の物へと変えたのだ。

イリヤはルビーを強く握る。キャスターはそれを感じ取ると、魔法陣をいくつかイリヤに向ける。攻撃開始の合図だった。

「イリヤさん!!」

瞬時にイリヤはトップスピードまで上げ、空を翔る。その後ろでは激しい爆発音が鳴りながら、イリヤを追撃していく。

背中を取られた戦闘機のようにひたすらに落とされまいと逃げるだけ。だがそれで問題ない。

凜とルヴィアが立てた作戦は単純だ。

機動力のあるイリヤは攪乱を担当。空を飛ぶと同時にキャスターの注意を集める。ライダーとの戦闘の経験より、カード回収の敵となる英霊は現象に近い物と凜は分析していた。それはつまり人が判断する要理も機械的になるということだ。こうして小回りの利くイリヤが注意を引くことに意味が生まれるのだ。

そしてそれは逃げから攻めに転じることで更に効果は増す。

速度を殺さぬまま、イリヤはキャスターを見据える。

「散弾!!」

威力は弱いが数のある砲撃を撃ち放つ。いくら威力が弱いと言っても、キャスターは白兵戦に特化していない。大量の攻撃を食らい続ければ無傷では済まない。

キャスターは魔法陣を動かしイリヤの攻撃を防ぐ。それにより、僅かではあるが攻撃の手は緩んだ。

「その調子です！威力入りませんから、このまま距離を維持したまま攻撃を続けてください!!」

「うん!!」

ルビーの声に自然とステッキを握る力が強くなるイリヤ。

凜たちが立てた作戦ではイリヤの担当は攪乱。戦闘開始前まで幾分の不安はあったものの、現段階では満足のいく働きをしている。

そしてもう一人の魔法少女である美遊に与えられたのは攻撃。イリヤが作り出した隙を生かして、距離を詰めて一撃殺。ライダーを一撃で仕留めたその能力を考えてのことだ。

「中くらいの——散弾!!」

そしてイリヤから放たれた攻撃。ついにキャスターは攻撃の手を止め、防御に徹した。

「やっておしまいなさい！美遊！！」

ルヴィアの声が響く。それがスタートの合図だったように、美遊は宙を蹴った。

またとないチャンス。キヤスターの意識は完全にイリヤに向けられている。そこに美遊のものはない。美遊は一瞬で距離を詰めると、一枚のカードを取り出した。

ランサーのカード。イリヤが凜から預かったものとは異なり、確かに英霊の宝具として扱うことができる一撃必殺の槍。それをサファイヤに当てる。

「限定——」

「……………え？」

それは、おそらくこの場にいる全員のもの。誰もが勝利を確信し、目の前の光景を理解することができなかつたが故に漏れた声。

美遊は確かにキヤスターの背中を取った。それは誰もが見た間違えようのない現実。
「消え——うっ！！」

地面が割れる音がした。

「ミユちゃん！！」

イリヤの悲鳴にも似た叫び声。それは割れた地面で蹲る美遊に向けたもの。

誰もが状況を読めない中、不敵に笑うようにそれまで美遊がいた場所に浮かぶキヤスターを見てルビーは理解する。

「まさか……転移魔術まで使うなんて」

確かに神代の魔女と理解させるその魔術に魔法使いの魔術礼装であるルビーですら息をのんでしまう。

次の瞬間、キヤスターの周りには魔法陣が浮かぶ。誰もが瞬時に理解した。

「逃げなさい、美遊!!」

ルヴィアが叫ぶ。

キヤスターは未だ満足に動くことのできない美遊にとどめを刺すつもりだ。

「ぐっ……」

なんとか体を起き上がらせる美遊。しかしその足からは大量の血が流れており、とてもではないが走ることも跳ぶこともできない。

「美遊!!」

「ちよっ、待ちなさい、ルヴィア!!」

とつさに走り出すルヴィアを押さえつける凜。

「離しなさい、凜!!」

「うっさい、バカ!!あんたが行ってもどうしようもないでしょ!!」

「何をおっしゃいますの！負傷した美遊を抱えて逃げるくらい——」

「私たちは勝手だけど、信じるって決めたでしょ!?二人の魔法少女を!!」

「!!」

凜の叫び声に言葉を失うルヴィア。

そして次の瞬間にはキャスターの砲撃が地面を砕く。激しい音が響いた後、張りつめた凜の表情が緩まる。

「……ほらね」

「——イリヤスフィール……………」

二人の死線の先には、間一髪砲撃を避け切った二人の姿があった。

ぎりぎりのタイミングで、最大速度でイリヤは美遊を抱えて脱出をすることができたのだ。紙一重とも呼べるタイミングに、イリヤはそれまで吐くことができなかつた息を重々しく吐き出した。

「ま、間に合った……」

「ナイスタイミングです！イリヤさん!!いやあ、さすがは魔法少女！友達を助けるタイミングでこそ力が発揮されますねー！なんとも燃えますねー!!」

イリヤの手の中で一人テンションが高いルビー。対して抱えられる美遊は珍しく動揺をしているようだった。

キャストから一定の距離を取ると、緊張を解かぬまま美遊を宙に立たせる。

「ミュさん、怪我は?」

「問題ない。すぐに治る」

チラツと美遊の足を見るイリヤ。確かにあれ程の高さから地面に叩き付けられた割には軽傷に見ることができ。それもカレイドステッキの能力なのだろう。

「申し訳ございません、美遊様……物理保護の強化が間に合わず」

「大丈夫。……それよりも自動治癒に魔力を割いてちょうだい」

「了解しました」

あれほどまでの危機に瀕していながら、美遊は相変わらずだった。それは齡十歳にして身に着けることのできる精神力なのだろうか。それは多くの魔術師を見てきたルビーとサファイアが共に抱いた疑問である。魔術に関わらず、一般家庭でその十年間を過ごしてきたならば、そう、イリヤスフィールがその模範的な存在であるはずだ。

キラキラとしているか、どこか憧れがあるから、取引による対価の重さなど知らず踏み込んでしまう。美遊はそれが嫌だった。だからこそイリヤの協力を拒んでいた。学校では敵対心を露わにし、人付き合いが得意であるはずイリヤですら距離を取ってしまふような人間を演出していた。

だが、現状としては――

「美遊様……、やはりお一人では」

「——わかつている」

自分の情けなさな苛立ちが隠せない。

美遊はギリツと歯を食いしばりながら手を握りしめる。それは痛いほどサファイアに伝わっていた。それでも主人を守るため、最善の手段を選ぶのが魔術礼装たる彼女の役目であった。

「いやあ、にしても転移魔術まで使いこなすなんて参りましたねー。さすがは神代の魔女っ娘！反則級ですよ、あれはー」

空気を読んでか、或いは否か。いつものような能天気な調子でルビーは笑う。

「そ、そうだね……。ここは一旦撤退して凜さんたちと作戦を練り直すべき——」

「いや、まだ手はある……」

キツと強い視線でイリヤを見つめる美遊。それは覚悟の表れ。誰かを頼ることは無い、そう決めていた美遊だからこそ決意する必要があった作戦。

「お願い、イリヤスフィール……、力を貸してちょうだい」

強く、ステツキを握り締める美遊は口を開く。

「ちよつと……あれ！」

遠く、安全圏と呼ばれる場所で見守っている凜が口を開く。

自分たちよりも年下で、巻き込んでしまった一般人であるイリヤたちに申し訳ないと感じながらも、凜とルヴィアはその光景を見ていた。

「まだ続ける気なの!？」

凜の目に映るのは先程と同じ光景。イリヤが持ち前の機動力を生かし、キャスターを翻弄する。素早く放たれた弾幕に防御のための魔法陣を敷くキャスターの姿には余裕が伺える。

「同じ作戦では無意味ですわ！一度撤退し、作戦を整えますわよ!!」

その判断は定石。

イリヤたちの手持ちカードではキャスターの能力を上回ることができない。いくらイリヤが攪乱をし、隙を狙って一撃必殺の宝具を使おうとも転移魔術の前では当たらない。だからこそ作戦を練り直すという選択肢が素人であるイリヤですら選ぶ定石なのだ。

それでも、美遊が選んだ選択は違った。

「……行くよ、ルビー！」

「いつでもどうぞ!!」

イリヤは最大の加速でキャスターへ突っ込む。それは先程までとは比べ物にならない速度。僅かな時間で最大速度に到達する。

美遊を飛び越え、キャスターとの距離を縮めるイリヤ。無論、近接戦を得意としないキャスターは転移魔術でその縮められた距離を再び開こうとする。

これはキャスターの手の内を理解しているからこそ、当然と判断することができると選。無論、凜とルヴィアはこの特攻の結末など高が知れていると撤退を推したのだ。

だが、

「……逃げられるなら」

イリヤはステッキを振りかざす。

「極大の散弾!!」

雨のように降り下ろす魔力弾。それはキャスターが地上からの攻撃を弾く為にと誣っていた反射板に落ちる。一撃ずつは決して英霊を仕留めることができな攻撃ではあるが、僅かでも足止めになると踏んだ。

「これだけの攻撃なら——さすがに全部受けるわけにはいかないよね！」

イリヤはニヤツと笑う。

それは美遊が立てた作戦が成功したから。キャスターは転移魔術よりも数多くの乱れ撃たれた散弾により、逃げ場なくその場で防御を選択していた。

そう、この一瞬があれば十分なのだ。

「弾速最大——」

キャスターよりも更に上空、背後をうまくとつた美遊はステツキの先端をキャスターに向ける。そしてそれまで自動治癒、物理保護に回していた魔力をすべてこの一撃へと回す。

「狙撃!!!」

その一撃はまるで仕返しと言わんばかりの勢いでキャスターを射抜く。激しい爆音と共に、キャスターは地面へと叩き付けられていた。

「まだです!!」

ルビーは叫ぶ。

魔女はそう簡単に命を落とさない。先程の美遊がそうであったように、ぼろぼろになりながらも体を起こす。

このチャンスを逃したならば、おそらく次はない。

それはイリヤですら理解できたことだった。イリヤと美遊は空を蹴り、キャスターへ

と突撃する。

「Anfang——!!」

「Zeichen——!!」

二人の魔術師の声が重なる。

「轟風弾五連!!!」

「爆炎弾七連!!!」

赤い魔術師と青い魔術師、二人の放った魔術はキャスターを焼き尽くす。いくら魔術耐性が高くても、瀕死の状態で時計塔主席である二人の魔術を直撃したなら無事ではない。

空に張られていたキャスターの魔法陣は消えていく。

「へえ……なかなかやるじゃないですか、あの二人も」

その光景を口を開けてみているイリヤの隣、感心した様子のルビー。魔法陣の消失はキャスターの魔術が消えたという証拠。傍観者であると思っていた二人が止めを刺したことに對し、純粹に評価せざるおえなかつた。

「美遊様……やりましたね」

「ええ……」

ゆっくりと地面へ降りる美遊はため息のように息を吐きながらサファイアの言葉に相槌を打つ。

今回は成功したが、転移魔術が連続で行えた場合を考えると我ながら勝負に出たのだと思ってしまう。確実性というものを重視するようにしているのだから、美遊自身自分らしくないと思ってしまう。

そして何よりも、手を借りるまいと思っていた相手の助力を得ての勝利だったのだからどこか腑に落ちない点がある。

認めるつもりはない。それでも——

この場にいる誰もが言い難い悪寒に襲われる。膨大な魔力の発生源、それに自然と視線が集まる。

「う、うそ……！」

イリヤは呟く。

勝利は確定したのだと思っていた。——それでも、この程度では死なないのだから「英霊」と呼ばれているのだろう。

イリヤですら一瞬では詰めることのできない距離、倒したと思っていたキャスターが

複雑な魔方陣を展開している。それが何を意図しているのか、瞬時にできたのは凜とルヴィアだけ。

「まずい……この空間ごと焼き払う気だわ!!」

凜が叫ぶ。だからといって手持ちの宝石を使い切ってしまった凜とルヴィアには現状を打開する術はない。撤退する時間を稼ぐ手段があるのなら、それを選択するが可能なのはイリヤか美遊だけ。

「ミン、ミニュさん!？」

凜がそう声をかけようとした瞬間、イリヤの叫び声が響く。

美遊は走っていた。強化を施し、空を蹴り、キャスターに向かって走り出す。だがそれでは――

「それじゃあ間に合わない!」

イリヤはルビーに魔力を込める。

美遊は後悔をしていた。

神代の魔女であるキャスターなのだから転移魔術を使用することなど容易に想像ができたはずだ。それを念頭に入れていたならば、ランサーのクラスカードで仕留めることができたはずだ。いかに相手が転移魔術で姿を消そうとも、ランサーの宝具とは必ず

相手を殺す、そう運命を捻じ曲げるものなのだから。

そしてカード回収を行わずに気を緩めてしまったこと。これは美遊だけのことでない。それでも、あの瞬間に追撃を——いや、全員の安全確保に徹することができていれば、こんな事態は起きなかった。その後も敵が生きていることを理解した瞬間に飛び出してしまった短絡的な判断がミスだ。撤退をすることが現状考えられる最善策だったのだが、今はそれができない。

何より——自分を救ってくれた恩人に報いることができない事、そして巻き込まれる必要がない人を巻き込んでしまっていることに対して後悔をしていた。

過去をいくら考え、後悔しても意味がない。それは美遊自身がわかっていることだ。

後悔などをするくらないなら頭を働かせる。読み切れ。そして掴め——
美遊は走る。

例え間に合わなかったとしても、ここで自分が命を張って走ることに意味がある。自分には彼のような力はないことを理解している。それでも、彼のように強い意志だけは持ち続けたいと願う。今度こそは——

「……きゃん!!」

「!?!」

イリヤの声が響く。咄嗟に美遊は振り返る。

するとそこには、イリヤが放った特大の魔力砲が美遊を——いや、キヤスターを——目掛けて走る。それは美遊が走るよりもはるかに速く。

「乗って!!」

キヤスターに向かう魔力砲とイリヤの言葉。美遊は瞬時にその意味を理解した。

美遊は空を蹴るように足に魔力を込めると、イリヤの言葉通り、魔力砲の先端に乗った。

「限定解除!!」

美遊はランサーのカードをサファイアに当てる。そして現れた紅い槍を構え、その真名を口にする。

「——刺し穿つ死棘の槍!!」

美遊の手に握られた紅い槍は、禍々しい魔力を放ちながら“相手の心臓を穿つ”という結論に帰結するように、眼前に放たれる巨大な魔力砲を切り裂き、キヤスターの心臓を貫いた。

「クラスカードキャスター——回収完了です」

美遊に握られたキャスターのクラスカードを見ながら、サファイアは主人にねぎらいの言葉をかける。

先程の凜たちの魔術では姿を見せることがなかったクラスカードに、美遊だけではなく誰もが安堵のため息をついていた。昨日から続く戦いもこれでようやく決着がついたのだと。

「ヒュキーン!!」

そして誰よりも先に、キャスターの攻撃を直撃し、それでも戦い続けて止めを刺した美遊に駆け寄ったのはイリヤだった。

「怪我はない? 私、あんな無茶なことしちゃったけど——」

あたふたと座り込む美遊の体に怪我がないか確認をするイリヤ。

いくら地面や空を蹴ったところで間に合わないかと判断したからと言っても、魔力砲を足場にすることをよしとしてしまったことに冷静になった今、イリヤは後悔をしていた。美遊だからどうにかなったが、自分だったら間違いなくキャスターの攻撃と板挟みになってしまっていたことがわかる。だからこそイリヤは勝利の喜びを感じるよりも先に美遊の身を案じていた。

「——問題ない」

そんなイリヤに対して、美遊はたった一言そう返すだけ。そんなぶつきら棒な言葉を向けられてしまつては、もちろんイリヤとしてもどうしていいのかわからなかった。

美遊はこの戦いにイリヤを巻き込みたくないと思っていた。

魔術協会から派遣された魔術師の持ち込んだ魔術礼装の勝手で巻き込まれたと言え、イリヤと美遊では戦う動機が違うのだ。

アニメや漫画と同じ、遊び半分でカード回収を行うイリヤを、自分の居場所の証明のために戦う美遊は認めることができなかった。そして、自分にはない家族や友人と過ごす“日常”を持っているイリヤをこちら側に引き込みたくないという気持ちもあった。

しかし、サファイアが美遊に進言した言葉も理解はできていた。

『カレイドの魔法少女は二人で一つです。二人が連携するからこそ、その真価は発揮されず』

美遊はぎゅつと自分の服の裾を握る。

それでもと、一人で戦うのだと決めていたのに、イリヤの協力があつてこそキヤスターに勝つことができた。

空を飛ぶことはもちろん、魔力砲を足場にするという発想は美遊にはできない。だからこそ、協力することが必要となることはわかつていた。……それでも。

「ミ、ミュさん、やっぱり怪我が痛む?」

険しい表情をしていた美遊を心配するようにイリヤは彼女の顔を覗き込んだ。その純粋な瞳に、やはり美遊は自分にならないものを痛感した。

「痛くない。……行こう」

「え? あ……うん」

手を差し伸べようとするイリヤをすり抜けるように、立ち上がる美遊。そんな美遊に何とも言えない気持ちになったのはイリヤだけではなく、ルビーとサファイアもだった。

年相応ではないと安い言葉を使ってしまえばそれだけかもしれないが、美遊が抱えるものの重さを垣間見せた瞬間だったのかもしれない。

とにかく、自分が思っていた以上に美遊が重傷でないことを理解し、安堵したイリヤは空を見上げた。

「……そう言えばさ、ルビー」

「なんですか? ああ、そうでしたね。祝砲ですよ! せつかくの勝利を祝うべきなのに……いやはや、ルビーちゃんもまだまだですなあ!!」

「いやいや、いらぬから! 祝砲とか恥ずかしい!! それに、上げるなら私じゃなくて

ミュさんに対してだから」

「……………」

美遊の無言のプレッシャーにイリヤとはルビーは乾いた笑みを浮かべる。

「いやー、残念です。せっかく用意はしておいたのに」

「よ、用意してたんだ……。つて、そんなことじゃなくて!!」

イリヤは必死に首を振り、ルビーに真剣な眼差しを向ける。

「ライダーの時みたく空が割れる前に戻らないと!!」

「——あ——」

必死な表情で訴えるイリヤにその場にいた他の三人は思考が停止する。

「イリヤ、逃げ——」

凜の叫び声が止まる。

それは叫びかけて止めたのではなく、叫ぶことができなかつた、というのが正しいのだろう。

「う、嘘……」

その声は誰のものか。

おおよそ、この場所で考えられるのは二人しかいない。そのうちの一人は、本来なら

あまり口を開くことはしない。

そう考えるのであれば、一人だけと表現するのが正しいのだろう。

それでも、ここではあえて二人と表現するべきである。

イリヤと美遊の目の前には一本の黒い剣握る少女と、恐らくそれに切り伏せられたのであろう凜とルヴィアが地面に倒れている。

イリヤの頭の中は真つ白になる。

これまで、自分に魔術を教えてくれた凜。戦いにおいて不利であつても負けることはなかった。それと同等の存在であつたはずのルヴィア。

二人が揃って倒れている姿を目の当たりにしているのだ。

それに加えて血――

今まで人からあんなに大量の血が流れているところを見たことがあるだろうか。

ドラマや映画であれば、あれは死ぬ間近の量。もちろん、これがイリヤの好きなアニメであるのであれば、話は別だが。

「リ、リンさん!!」

飛び出すイリヤ。

今すぐどうにかしなければいけない。

どうすればいいのか、それはわからなかったが、ただただ体が動いていた。

「待つて！イリヤスフィール!!」

それに対して美遊はイリヤの肩を掴みを止める。

「でも、リンさん達が!!」

「落ち着いてください、イリヤさん」

次はイリヤの手元からいつも通り、落ち着いた様子でルビーはイリヤに語り掛ける。

「お二人とも出血は酷いですが、生体反応があります。ちゃんと生きています」

「そ、それなら尚更——」

「イリヤスフィール」

「——ッ」

ルビーの言葉を聞いて、再び飛び出しそうなイリヤの名前を美遊は静かに呼ぶ。

静かで、冷静で、恐怖や怒り、焦りといった感情を全く感じさせない声。およそ、その声からはイリヤと同じ年と考えることなどできないものだった。

「だからこそ、冷静に、確実に、行動するべき。そうしないと二人は——」

イリヤは自分の肩にかけられる力が強くなったことを感じ、そこで初めて冷静になる。

ああ、そうだ。

今、この場所にはいつも自分を守ってくれる両親も居なければ、助けてくれる家政婦

達もない。優しく笑顔で傍にいてくれる兄だっていないのだ。

この場所で凜とルヴィアを助けられるのは自分と美遊だけ。

二人を確実に助けるために、美遊の言う通り冷静に判断しなければいけない。ルビーを握る手が自然と強くなる。

「絶対に二人は守る」